

長野市の埋蔵文化財第7集

田 中 沖 遺 跡

—国道18号線篠ノ井バイパス緊急発掘調査報告書—

1980.3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

序

長野市には1200ヶ所を超える埋蔵文化財包蔵地及び古墳があります。そのほとんどが千曲川の自然堤防上あるいは山間山麓の扇状地・台地上に散在しています。ただ川中島・真島・篠ノ井地域を含む犀川扇状地においては、和名抄にみられるいくつかの郷名があるにもかかわらず、今回調査の対象になった田中沖遺跡他2遺跡しか見つかっておりません。たぶん犀川による堆積土層下深くに眠っているものと思います。それ故に今後の調査を期待しているところであります。

さて、犀川扇状地先端近くに位置し、範囲が確定できるこの扇状地を代表する本遺跡に、国道18号線篠ノ井バイパス建設計画が持ち上がり、この公共性及び遺跡の重要性から緊急に発掘調査を実施し、記録保存をはかることになり、昭和53・54年度に調査を実施いたしました。

時節柄多忙の時期にあたりましたが、建設省長野国道工事々務所の委託を受けて長野市教育委員会・長野市遺跡調査会がこれにあたり、本書のような学術上重要な成果を得ましたことはご同慶のいたりと申せましょう。

この報告書の刊行にあたり、教育・学術研究の場で大いに活用され、またこの調査が古代の犀川扇状地を解明する手掛りになれば望外の喜びであります。

最後に発掘調査から報告書作成までご尽力をいただいた長野市遺跡調査会ならびに同調査団の森嶋団長他調査員の皆さん、また地域において埋蔵文化財に深いご理解をいただき発掘調査に終始ご協力をいただいた区長・地主・区民の方々、あわせて多大な励ましをいただいた多くの関係者に、衷心より感謝の意を表します。

昭和55年3月

長野市教育委員会教育長
長野市遺跡調査会長

中村 博二

例 言

1. 本書は昭和53・54年度において建設省長野国道工事事務所と長野市・長野市遺跡調査会との契約に基づく、国道18号線篠ノ井バイパス建設に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 本書は調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示することを重点においた。尚遺物の詳細については、図前頁に表にして記した。
3. 遺構は発見調査順に番号を付し、図は第1次が竹内、第2次が青木（和）が担当整図した。
4. 遺物の実測は第1次が原・直井・小林・石上・竹内が、第2次を竹内・青木（和）があたり、原・小林・青木（和）が整図した。
5. 遺構写真は原・矢口が担当し、遺物写真は竹内が行なった。
6. 遺物実測図中、推定復元可能なものは鎖線で、黒色処理されるものは黒点で表示した。
7. 遺構・遺物の執筆は各調査員の住居址等遺構カードにより調査員協議のもとに第1章を事務局、第2・4章を森嶋、第3章のうち第1次調査分を原、第2次調査及び第2節以降を矢口が行なった。
8. 本書の編集・印刷関係の業務は長野市教育委員会が担当した。
9. 遺物や関係図面・諸記録は長野市教育委員会で保管している。

本文目次

序	
例言	
第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査日誌	1
第3節 調査会の編成	5
第4節 調査参加者一覧	6
第2章 遺跡周辺の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 遺構と遺物	11
第1節 住居址	11
1 第1号住居址	11
2 第2号住居址	11
3 第3号住居址	12
4 第4号住居址	12
5 第5号住居址	12
6 第6号住居址	12
7 第7号住居址	13
8 第8号住居址	13
9 第9号住居址	13
10 第10号住居址	14
11 第11号住居址	14
12 第12号住居址	14

13	第13号住居址	15
14	第14号住居址	15
15	第15号住居址	16
16	第16号住居址	16
17	第17号住居址	16
18	第18号住居址	16
19	第19号住居址	17
20	第20号住居址	17
21	第21号住居址	17
22	第22号住居址	17
23	第23号住居址	18
24	第24号住居址	18
25	第25号住居址	18
26	第26号住居址	18
27	第27号住居址	19
28	第28号住居址	19
29	第29号住居址	19
30	第30号住居址	19
第2節	柱穴群	20
第3節	土 壙	20
第4節	溝 址	21
第5節	集石址	22
第6節	その他の遺物	22
第7節	他地点の調査	22
1	B地点(小島田農協裏)の調査	22
2	水田地の調査	23
第8節	土層序	23
第4章	結 語	24

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺の環境	42
第2図	田中沖遺跡周辺図	43
第3図	田中沖遺跡調査地	44
第4図	田中沖遺跡遺構分布図	45
第5図	第1～3号住居址実測図	46
第6図	第4～7号住居址実測図	47
第7図	第8・17号住居址実測図	48
第8図	第9・24号住居址実測図	49
第9図	第10～12号住居址実測図	50
第10図	第13～15号住居址実測図	51
第11図	第16・18～20号住居址実測図	52
第12図	第21～23・28号住居址実測図	53
第13図	第25・26号住居址実測図	54
第14図	第23・27・29号住居址，土壇8，溝3実測図	55
第15図	第30号住居址，土壇1～3実測図	56
第16図	土壇4・5，内耳付土器出土状態，溝1・2実測図	57
第17図	柱穴群実測図	58
第18図	第1～3・6号住居址出土土器	59
第19図	第6～10号住居址出土土器	60
第20図	第11・12号住居址出土土器	61
第21図	第12・13号住居址出土土器	62
第22図	第13・14号住居址出土土器	63
第23図	第16～18・20号住居址出土土器	64
第24図	第21・23・26号住居址出土土器	65
第25図	第23・28～30号住居址出土土器	66
第26図	土壇4・5，柱穴群，その他出土土器	67
第27図	第13・3・6・11・30号住居址，その他出土製品・石製品	68
第28図	第9・10・13・16号住居址，その他出土鉄製品	69

図 版 目 次

- 第1図版 田中神遺跡(調査地)遠景
第2図版 調査地・調査地より北を臨む
第3図版 土層序・遺構分布状態(西より)
第4図版 遺構分布状態(西より)
第5図版 遺構分布状態(南より)
第6図版 第1号・第2号住居址
第7図版 第3号・4号・5号住居址
第8図版 第6号住居址
第9図版 第6号・7号住居址
第10図版 第7号住居址
第11図版 第8号住居址
第12図版 第9号・24号住居址
第13図版 第10号・11号住居址
第14図版 第12号住居址
第15図版 第13号住居址
第16図版 第14号・15号住居址
第17図版 第16号・17号住居址
第18図版 第18号・19号住居址
第19図版 第20号・21号住居址
第20図版 第22号・23号住居址
第21図版 第22号・第23号・第28号住居址, 土壇 8
第22図版 第25号・26・27号住居址
第23図版 第28号・29号住居址, 溝 3
第24図版 第30号住居址
第25図版 土壇 1・2
第26図版 土壇 3・4, 柱穴群
第27図版 土壇 5
第28図版 土壇 6・7, 溝 1・2, 集石址
第29図版 出土状態
第30図版 調査スナップ(第1次調査)
第31図版 調査スナップ(第1次調査)
第32図版 調査スナップ(第1次調査)
第33図版 調査スナップ(第2次調査)
第34図版 第1・2・6号住居址出土土器
第35図版 第7・9号住居址出土土器
第36図版 第10・11号住居址出土土器
第37図版 第12・13号住居址出土土器
第38図版 第14・16・17・21号住居址出土土器
第39図版 土壇 5, 柱穴群その他出土土器・陶器
第40図版 第23・2・10号住居址及びその他出土土器・土製品
第41図版 鉄滓・鉄製品・石製品

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

最近の国道18号線の混雑を鑑み、建設省長野国道工事事務所は、笹ノ井橋から大橋にかけてのバイパス道を計画し、一部工事を着工していた。

ところが、その路線内に田中沖遺跡の北側がかかることがわかり、建設省は県教育委員会に通知し、そして市教育委員会が加わり協議するところとなった。まず三者により現地において遺跡存在の有無、有の場合はその範囲を確定することにし、現地に赴いた。当初県で遺跡を想定していたところは、県道松代線のすぐ西側の果樹園であったが、地形的にみてそれよりも西南の微高地にその存在の可能性を見い出し、さらに地元の人達の話しによれば、微高地北東斜面から長沢千秋氏により甕土を伴う土器が採集された地点でもあったので、調査地を微高地及び北東斜面に求めた。しかし、バイパス建設の工事は微高地頂部まで進められており、その部分はすでに削平され、盛土されていたので、工事をその部位までで停止し、事前に発掘調査を実施することにした。尚、この地域では遺跡の確認が田中部落を中心になされているのみで、他の微高地ではなかった。そこで、微高地下の水田及び本調査地の対岸というべき農協裏の微高地も調査対象にし、水田址・集落の存在を確認することにし、本調査への準備を始めた。県教委より調査計画・経費の算出が行なわれる一方で、市教委では国道工事事務所と調査期日等協議を重ね、補正予算計上、調査団の編成及び小島田区へ作業員の手配等の協力を依頼し、着々と調査準備を進めた。その結果、調査地内にある未移転の民家を除き、当初調査予定面積1,800㎡のうち約1,300㎡を昭和53年度に、残りの民家跡地(約500㎡)を昭和54年度に実施することにし、昭和53年度の第1次調査を10月1日から約1ヶ月の期間で実施することになった。

第1次調査終了後、昭和54年度当初に第2次調査を予定したが、民家移転が遅れ、また他の遺跡の調査及び行事等が重なっていたため、第2次調査は第1次調査の約9ヶ月後の8月7日より約2週間の予定で実施することになった。

第2節 調査日誌

(第1次調査)

10月4日(曇) 器材搬入、調査に先き立ち調査会長(教育長)より挨拶があり、諸注意を行い、調査地区内の雑物の撤去及び草刈り作業を行う。

10月5日(小雨のち曇) グリットの設定。車道予定地中心から割出し長野方向へアラビア数字で、北から南へアルファベットを用い表示した。B~D-1・3・5, B・D-8, B-9, F-3・5・7, G-3, H-1グリットの調査にかかる。F-5に住居地の可能性がある。遺構面が浅く、後世の擾乱が著しい模様である。遺物は少なく須恵器・近世陶器片を得た。

10月6日(曇時々晴) 昨日に引き続きグリットの調査を行う。新たにB-2, C-2・4 D-2・4, E-3・5・7にかかる。調査地各所に遺構状落ち込みがある。

10月7日(晴) 遺構の状況から全面の表土を除去することを決め、B-6, C-7, E-2・4・8, F-0・2・4・5, G-2, F-0・2・4・5, G-0・2, H-0・2・3, I-4のグリット調査を進める。D-4ラインに土層観測用壁を設定する。遺構プランの確認は土層が複雑で困難を極める。遺物出土量は少ないが、磨耗しているものは少ない。微高地の地形測量をする。

10月8日(晴) 北風が吹き寒い。グリットの拡張(C-1, E・F-9, G-5, H-7, I-1・2)を続ける一方遺構プランの追求を行う。C・D-7~9に焼土を伴う遺構があるが、出土遺物から後世のもの可能性がある。B-1に深さ約2mの土層観測用坑をうがう。

10月9日(晴) A・C-7~9, D・E-6, D-9, H-0グリットの拡張調査を続ける。遺構プランの追求を続けるも、晴天が続いたため堅く困難を極める。土層観察後実測する。信毎晶山記者来訪。

10月10日(小雨のち曇) グリット(A-6・7, G-5~7・9, H-4, I-0・1)の調査をする。H-7に土層観測用ピットをあける。G・H-0~2に住居地か。長野県考古学会幹事9人來訪。

10月11日(晴) 昨日に引き続きグリットの調査を進める。H-5・6・7, G-8・9, I-4~7, J-1~4, B-10, H・I-5~8にかけ住居地がある見込みで、G-6で発見した住居地は意外に大きく未調査地(土蔵下)へ入る。第3号住居地の調査にかかる。C-9付近より半完形の灰釉碗形陶器・治元通寶を得た。

10月12日(晴) 第2・3号住居地の調査を進め、第2号は浅く、実測・写真撮影をする。第4・5号住居地、土壌1のプラン確認を行う。本日のグリットの拡張はE・F・Oの西端及びC・E-12・B-11である。第2号住居地より筒形土製品が出土した。

10月13日(晴) 第2号住居地の土器を取り上げる。第3~5号住居地、土壌1の調査を実施し、土壌1は精査後写真撮影・実測作業終了後、第6・7号住居地のプラン追求を行う。D-10・11・12, E-11・12, C-12の拡張を行い、B・C-9~12に住居地3軒以上ある見込み。G・D-10より高坏・坏が、第6号住居地覆土より軽石製紡錘車が出土した。溝1・2の調査にかかる。

10月14日(晴) A・B-16の調査をする。第1・6・7号住居地の調査を進めるとともにA~D-9~12付近の遺構プランの追求する。溝1の実測・写真撮影を行う。信毎晶山記者来

訪。

10月15日(晴) A～F-16～18のグリット調査、第1・6・7・9号住居の調査を進めるとともに、第9号住居の調査にかかる。小島田農協裏敷高地に試掘坑を明け、遺構・遺物の確認のためトレンチを入れ調査するも、1.4m下で砂利層になり、上部は粘土単層になる。第1・6・7・9号住居の写真撮影、第1・6号住居の実測作業を行う。

10月16日(晴) 調査地東側は採土されており、表土はすでになかったが、確認のため、現表土を薄くはぎとる作業を行う。第8号住居址プラン露呈のため、南側を拡張する。A～E-10～14を整地し、遺構確認調査を進める。第1・6号住居の写真撮影・実測作業を行う。

10月17日(晴) 昨日に引き続き東側調査地の表土はぎを続ける。第8・11・13号住居の調査を開始する。第3号住居の覆土土層実測をする。

10月18日(晴) 東側調査地の表土はぎを続ける。また第6・8・9・11・13号住居の調査も進行する。第8号住居のカマド右袖は破壊をうける。土壇4の調査にかかり、写真撮影・実測まで終了し、土器のとり上げを行う。第4・5号住居の写真撮影・実測作業を行う。第8号住居址南西コーナーに変形土器が完形に近い形で出土した。A～H-17～19の遺構確認調査をするが、耕土のため破壊が著しく困難を極める。国道工事事務所より6人來訪。

10月19日(晴) 第3・6・8・9・11号住居の調査を進め、新たに第22・24号住居、柱穴群の調査にかかる。第3・8・13号住居の実測、第13号住居の写真撮影を行う。国道工事事務所2人來訪。

10月20日(曇のち晴) 東端表土はぎを進め、住居址様遺構を発見し、順に第25～27号住居址と呼ぶ。第16・20～22号住居の調査を進めるも、第21号住居は調査地域外に延びるため、地主の長沢千秋氏の許可を得て拡張調査をする。第3・6・8・10・11号住居の写真撮影及び第6・11・13号住居の土器とり上げ作業を行う。信毎晶山記者來訪。

10月21日(小雨のち曇) 朝方まで前夜の雨が残り調査があやふまされたが、開始時には上がる。東端の表土はぎを続ける。第24号住居の調査を進めたところ第9号住居は更に大きくなる見込みで、合わせて調査をする。新たに第14号住居の調査を開始する。第13号住居の実測を行う。

10月22日(晴) 山々の白さが目立ってきた。第16・17・21号住居の調査を進めるとともに新たに第23・24号住居の調査にかかる。第11号住居の土器をとり上げる。第15・22号住居の写真撮影を行い、第13号住居のカマドを検出する。読売新聞の記者來訪。

10月23日(晴) 東端の表土はぎ、整地作業を進めるとともに水田址を求め、現水田内の雑草刈りをする。第8・14・21号住居の調査を続け、新たに第12・16・23号住居の調査を開始する。第8号住居のカマドを切る土壇2は円筒形で周囲を粘土で囲め、底部に配石がある。第8・9・17・24・21号住居の実測・写真撮影作業後土器のとり上げを行う。第11号住居より獣脚骨片が出土した。土器洗浄。更北有放來訪。

10月24日(晴) 東端の整地作業を行う。第12・14・16号住居の調査を進め、第18・25・

27号住居址にかかる。第12号住居址より出土遺物が多い。第16号住居址の写真撮影を、第21号住居址の実測作業を行う。土器洗浄。長野市の広報番組の採録のため、SBC・米山先生来訪。10月25日（曇）東端の整地作業を進める。遺構・遺物なし。第8・23・25号住居址の調査を進め、新たに土壇5、第27号住居址の調査にかかる。第8・21号住居址の実測、第16号住居址・溝2の写真撮影を行う。本日より水田址の存在確認のため、バイパス記号No313のセンターよりDラインに30m、Fラインに30mのトレンチを設定し、調査にかかる。土器洗浄。信毎島山記者来訪。

10月26日（晴）昨日に引き続き水田のトレンチ調査を進行する。第12・19・26号住居址、土壇4・5及び柱穴群の調査を完了し、写真撮影をする。遣り方設置。本日で主たる調査を終了する。小林勇氏つくりし歌、「跡忍古代発掘朝夕に老いも若きもああ終着駅」

10月27日（曇のち雨）水田の調査を続ける。遺構周辺の清掃及び写真撮影を行う。土器洗浄。遣り方設置。

10月28日（曇のち雨）水田の調査を続ける。遣り方設置後、全体測量を行う。土器洗浄。信毎島山記者来訪。

10月29日（曇・雨・晴）水田の調査は昨夜の雨で冠水をうけ調査を断念する。危険防止のため周囲に綱を張る。土器洗浄・全体測量を行う。

10月30日（晴）第25・26・27号住居址の写真撮影をする。全体測量を行ない、天幕撤去等の作業を行い、遺構を第2次調査に向け覆う。長野国道工事々務所長等来訪。

10月31日（晴）第25・26・27号住居址の実測を行う。グラウンドシートにて第2次調査にそなえるべく全遺構を覆い、今回のすべての調査を終了する。

（第2次調査）

8月6日（晴）調査器材搬入作業を行う。

8月7日（雨のち晴）本日より作業を開始するも昨夜来の雨にて調査地内の条件悪し。第1次調査遺構等はわずか10ヶ月余の間に崩れが著しく、また雑草が繁茂していたため、その整備をするとともに調査地内の雑草刈りを行う。

8月9日（晴）昨日に引き続き、既掘遺構の整備を行う。グリットを設定する。道路市南端よりグリット調査を開始する。

8月10日（晴）今回も調査地の全面表土をはぐ方針で総力を上げ掘削作業にかかるも、宅地跡のため木片・砂利が残されており、困難を極め、思うように進まず。土師器・須恵器片及び勾玉が出土した。

8月11日（晴）昨日と同様表土削除作業を行う。旧民家跡地より内耳付土器が正位の状態で出土し、周辺を遺構確認のため調査を進めるも付近から一升瓶が出土するなど、擾乱が著しくその存在を明確にすることができなかった。

8月12日（曇のち晴）表土除去を行う一方、第1次調査で確認した第23・24号住居址及び第29号住居址のプランを追求する。

8月13日(晴・雷雨) 今日から16日まで盆休みとし、本日は調査員等により、遺り板・遺り糸を設置する。

8月17日(晴) 第28号住居地のプランを追求するに第24号住居地より新しいものとわかり調査を進める。第29号住居地を切る溝址3の調査と実測作業をする。

8月18日(晴) 第17・29号住居地のプラン確認と調査を開始する。

8月19日(晴) 第12号住居地の東側壁の追求を行う。第28号住居地の精査後、実測・写真撮影作業を行う。

8月20日(晴) 第22号住居地の調査にかかる一方、第30号住居地の確認を急ぐ。第12・22号住居地の実測・写真撮影作業を行う。

8月21日(晴) 第23・30号住居地の調査にかかる。第17・29号住居地の実測・写真撮影を行う。

8月22日(晴) 第23・30号住居地精査後実測及び写真撮影を行う。一部器材を撤収する。本日で作業を終了する。

8月23日(晴) 測量図点検・補足作業及び遺構全体図を作成し、現場における全調査を完了する。

8月24日(晴) 器材を撤去する。

8月25日～3月 遺物洗浄・注記・復元・実測・整図作業を行う。

第3節 調査会の編成

1 調査会

会長	中村 博二	長野市教育委員会教育長
委員	米山 一政	長野市文化財保護審議会会長
〃	桐原 健	〃 委員
〃	森嶋 稔	調査団長
〃	横山 勝	長野市教育委員会教育次長(昭和53年度)
〃	千野 和徳	〃 教育管理部長(昭和54年度)
〃	関川千代丸	〃 社会教育課嘱託
〃	矢口 忠良	〃 〃 主事
監事	青沼欣一郎	〃 庶務課長

2 調査団

調査団長	森嶋 稔	日本考古学協会会員・上山田小学校教諭
〃 主任	矢口 忠良	〃 長野市教育委員会主事
調査員・補助員	矢島宏雄(更埭市教委)・原明芳・島羽英雅・百瀬久雄・竹内稔・石上周蔵・直井雅尚・小林秀行・白田美智子・赤羽史子(以上信州大学生)	

青木和明・市村勝巳・奈須野由美（以上明治大学生） 青木一男・森嶋乃利（以上国学院大学生） 滝沢公明（専門学校生）

3 事務局

事務局長 丸山 善正 社会教育課長（昭和53年度）

関口 仁 “ （昭和54年度）

担当局員 相沢 金治 “ 課長補佐

“ 吉池 弘忠 “ 文化財係長

“ 矢口 忠良 “ “ 主事

“ 関川千代丸 “ “ 嘱託

“ 補助 阿部綾子・竹内恵子

第4節 調査参加者一覧

（作業員） 長沢邦恵・下田武子・中沢昭治・岡沢賢一・大田みさ子・水島喬・水島千恵子・伊藤節子・岡村よし子・藤丸高士・岡沢けさ美・阿部嘉美・山崎楓子・安川とし子・佐藤脩雄・岡沢精・岡沢文夫・中村公雄・山野井貫秀・水野うめ子・中島千春・徳成なお子・長沢徳治・宮下寛・関屋静子・岡沢雅幸・長沢岩男・宮下しづ江・小林とみ子・岡沢幸一・本田順子・五明昌夫・小山千春・長沢靖代・小林玉糸・北村たけ子・小林誠・堀内時雄・池田令子・小林こう・長沢久子・小林光子・小林愛子・丸山さと・滝沢尚子・伊藤忠雄・小林勇・小山初み・北条文子・上条伸子・藤岡網枝・桑原かく・倉崎清子・本田たかえ・小林登美雄・岡沢良子・滝沢雅子・高野林・小山貞一・小泉五万地・岡沢治子・長沢梅代・北沢郁子・相沢俊・金井徹・村上育子・鈴木とし江・石川富子・下平重春・宮林次郎・岡沢秀彦・吉川幸男・小林サキ子・竹内久子・松林英文・小宮山晴彦・岩崎淳子・沢山小冬・松沢憲一・北沢公夫・岩崎武重・飯島研一・近藤栄一・沢山ふじ子・伝田君子・上条哲・加藤あさ美・大矢桃子・小出賢一・丸山一登・沖本三四五・小山初み（以上昭和53年度）

小林勇・長沢久子・岡沢治子・小林こう・徳成なを子・佐藤脩雄・丸山さと・本田たかえ・伊藤節子・岡村よし子・小泉五万地・岡沢雅幸・中島千春・北条和彦・大内礼子・中田英子・黒岩俊彦（以上昭和54年度）

以上記した方々の他長野国道工事々務所調査係等関係職員・小島田区長及び地区の方々には多大な御援助をいただいた。記して感謝の意を表します。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

信濃の中央部を縦貫し、中央山地を横切って東流する犀川が、細く曲流するV字谷から開放されるのは犀口である。犀口を扇頂とする、いわゆる川中島扇状地は、極めて巨大な地形を千曲川水系の中にしめている。千曲川の一支流である犀川は、中央山地の隆起運動にうも勝って東流する強力な侵蝕河川であるが、犀口をもってその侵蝕性は強力な堆積性となって、善光寺平中央部へと展開しているのである。その堆積力は極めて優勢であったと思われる歴史的状況である。

中央山地は第三紀末の海底堆積物によって構成されているが、それは第四紀の中葉より隆起をはじめ、陸化、造山運動を続けているように観察される。その隆起速度は中世末に至って若干鈍ったように観察されるが、それは次のような理由によるものである。

①古代、中世における犀川扇状地の堆積力は極めて強力なものであり、それによって千曲川は、右岸上信越山塊の山脚部をトレスするように流れていること。それは千曲川の侵蝕力より犀川の堆積力の方が優位にあることを物語る。

②それが近世に入ると次第に犀川扇状地の堆積力が弱まったことが明らかである。その1つに千曲川は次第に山脚部からはなれて、かつて犀川堆積勢力のエリア内にと流路を移動していることによって把握できる。中世後期の松代・海津城も元は水城であったとされ、松代荒神町には現在でも舟つき場の石垣が残されている。

③江戸初期、松代藩城代花井吉成による川中島扇状地内の農業用灌漑堰の改修が行われているが、その犀口の取水口については、何回かの改修の記録が残されている。それは昭和30年代の小田切ダム建設に至るまで続けられてきたのであるが、それは取水口を上流へ上流へと移動した記録なのである。結論的に言えば犀口取水口における河床の沈下である。扇状地の堆積力にはふり、扇状地そのものの侵蝕が始まっているのである。裾花川はかつて長野市泉町で犀川の堆積力におされ東流していたが、流路の人工的変更によって犀川に合している。これも堆積力の今昔を物語る重要な事実である。

古代、中世に至るまで、川中島扇状地は中央山地造山運動にかかわる新鮮な堆積のくり返しであるとみることができる。その川中島扇状地は、現犀川右岸地域に49.8km²の広さを持ち、左岸地域に21.7km²、合わせて71.5km²に及ぶものである。その傾斜度は0.4% (0.18°) 内外である。ここには犀川はもとより、北から小山堰、鯉沢堰、下堰、中堰、上堰、そして御幣川がこの扇

川中島扇状地の地表計測

	標高 m	距離 m	標高差 m	傾斜度 %	面積 km ²			
唐 嶺	355	6,800	-25	0.36 (0.17°)	21.3	28.5	49.8	71.5
松 代	352	8,100	-28	0.35 (0.15°)				
落 合 橋	340	9,900	-40	0.40 (0.18°)	21.7			
屋 島 北	325	13,000	-55	0.42 (0.19°)				

※塚口標高380mを基点としたもの

状地を走っている。そのほとんどは自然流を改修したものであって、この堰の古さをも表わしていると言えよう。

なお弘化四年(1847)の善光寺大地震には犀川が岩倉山の山崩れにて20日間塞ぎ止まり、のち溝水の上崩壊した。川中島扇状地の途方もない土量の堆積がこの時にみられたのであるが、これが近年における最大で最後の堆積である。しかしこの堆積は、自然の突然の災害というアタシメントによるものであることを注意しておかねばならない。

川中島扇状地はこうした成因によって形成されたものであることをみておく必要がある。

なお善光寺平そのものの成因が信越山塊の微隆起による一種のたたえの感があるのだから、相関する形成構造をなしているものとみることができよう。

田中沖・田中遺跡はそのほぼ中央部の標高352m、扇端に近いところに位置しているのである。千曲川左岸、川中島扇状地には既知の遺跡は極めて少ないのが注意されるところである。

第2節 歴史的環境

川中島扇状地の歴史的展開は有史時代になってめざましい。12世紀末、木曾義仲対城資永による横田河原戦(1181)にはじまり、いわば中世の幕あけにつながる事件として重要な位置をしめるものがある。源頼朝の善光寺再建(1191)そして参詣(1197)はこの善光寺平のもつ重要な意味を内蔵していると言わべきである。

10世紀、いわゆる延喜式と俊名抄の記載にかかわる、神社及び郷名については、ここに更級郡の北城、そして水内郡南城・埴科郡北城では、おそらくは信濃最大の人口密集地域としての重要な課題が包含されていたに違いない。更級郡9郷11社中3郷3社が、水内郡8郷9社中2郷2社は、おおむねこの川中島扇状地内に存在した可能性が高い。犀川右岸のみに限定してみても、斗女・池部・氷鉋郷は確実に位置づくものであるし、布施神社・氷鉋斗完命神社・頭気神社はこの内部にあるものと考えてよい。特に氷鉋郷・斗女郷は特に巨大な共同体であったとみることができる。というのはその氏族の奉祭する氏神である神社はおそらく氷鉋斗完命神社



であったと考えてよく、氷斗・斗女両郷はもともと単一の氏上をもつ地縁共同体であったに違いないものであろうからである。それが行政的な神であるおよそ60戸をもって1郷とするというリミットによって2郷へと分けられて登載され、行政組織とされていたとみることができよう。従って、この氷斗斗完命神社を中心とする共同体が大きなものであったかをうかがい知ることができるのである。それにもう一つ、おそらく郷にはなれない単位の共同体であったと思われる布施神社を中心とするものは、今日においても川中島扇状地の南部に位置する一つエリアを専有するものであるが、おそらくこの単川右岸地域だけでも四郷に近い共同体の存在を確認できるように思うのである。

延喜式左馬寮勅旨牧，信濃16牧のうち大室牧は単川右岸東端地域に位置していたにまちがいはなく、その牧はこの地域を専有する氏上によって把握され、経営されていたものと見ることができよう。古代における水稲農耕に深く関与する神社はその存在の密度によっても、水稲農耕の密度を知ることのできる尺度でもある。更級郡9郷11社・埴科郡7郷5社・水内郡8郷9社・高井郡4郷6社は、時に伊那郡4郷2社・佐久郡7郷3社と対比してみると明らかであろう。人口密度の側面だけでみても、伊那谷をすべて合わせて4郷に対し、単川右岸地域のみにも4郷に近い存在であるということは重要な問題であるといえるのではないだろうか。この川中島扇状地の高い農業生産力を物語ってあますところがない。

田中沖遺跡及び田中遺跡は、特に古墳時代より平安期を中心とした遺跡であるが、ここにふれてきた歴史的展開の中に位置づいているものとみてよい。

古墳時代の環境も同様にしてみると興味あるあり方をしていることに気づく。特に6～7世紀代後期古墳群の存在は、その10世紀における人口過密現象に強い相関関係を示しているのであって、とりわけ長原・大室・松代古墳群はその数において注目すべきものがある。それはとりもたず、この川中島扇状地の高い農業生産力を背景としたものであったと理解でき、それ以外の歴史的背景の理解を許容できないものとみることができよう。いわば、すでに地理的環境においてみたように千曲川は古代においては山脚部をなめるようにして流れていたのであるから、千曲川右岸は松代以南を除いて、以北には沖積地はまったくなかったのである。大室・長原古墳群は川中島扇状地の彼岸であったのである。

その支配構造の存在を可能にした、川中島扇状地の生産力は、農業生産を基底とした共同体であったことは疑うところではない。

そうした歴史的環境の中にあってもなお、この川中島扇状地における遺跡数はあまりにも少ない。堆積土量の薄くなる扇端部のみ遺跡が明らかになっているという現実をみると、やはりその埋蔵されている量の大きさを推定することができる。6～12世紀における人口過密地域の遺跡の課題として、田中沖及び田中遺跡群のもっている意味は大きい。今後更にこの地域における歴史的展開を明らかにしていく手がかりを与えてくれるということができよう。

第3章 遺構と遺物

第1節 住居址

確認した住居址は敷掘区北東緩斜面に展開し、西よりのより高い位置に密集する傾向にあるようであるが、第20号住居址より第25号住居址の中間区域は調査に先きだちすでに採土が行われ、連続していたのか不明である。住居址の掘り込みは基本的に黄褐色（砂利混り）砂質土層である（第3～5図版）

1. 第1号住居址（第5・18図、第6・34図版）

本住居址は発掘区域西側に単独で検出された。プランは南北4.80m・東西3.28mの長方形に近い形を呈する。カマドは北壁東寄り位置する。主軸方向はN-15°-Wである。各コーナーは丸味をもち壁高は27cm前後で床面へと続く。床面は全体に軟弱で、凹凸が著しく小石が多くみられる。柱穴は北西隅近くに径40cmで深さ15cmをはかるものが1個検出されているが、他には検出することができなかった。また、南西隅には長軸1.2m×0.75mで深さ11cmの浅い掘り込みがみられ、貯蔵穴であろう。カマドは燃焼部幅95cmをはかるが、煙道部は検出することができなかった。構築時には両袖をもっていたようで、右袖の位置に長方形の石が立つ。

遺物は、甕形土器が床面に伏せられるように出土した他は坏・甕形土器片が少量出土したにすぎない。甕形土器は小形の碗形を呈するもので1孔を有する。甕形土器の口縁部はくの字状に展開する。坏形土器の底部は丸味をもち、碗形になり、内面黒色処理されたものもある。この他須恵器直口壺の口縁部が2点出土し、共に先端が内弯する。これらは上部覆土中からの出土であるが本住居址と関連ある遺物としてとり上げた。

2. 第2号住居址（第5・18図、第6・34・40図版）

プランは北壁2.65m・西壁2.52mの方形に近い形を呈する。カマドや焼土はみられない。各コーナーはやゝ丸味をもち、壁高は11～21cmでゆるやかなちあがる。床面は砂利混りで軟弱である。柱穴はなかった。

遺物は住居址の南西隅より北東隅にかけて床面から5～10cm程浮いた状態で出土している。内面輪積成形痕と指頭痕を顕著に残す円筒形の土器、碗形で底部がへら削り整形される坏形土器と高坏形土器脚部がある。この坏形土器には内面黒色処理されたものがある。

3. 第3号住居址（第5・18・27図，第7図版）

調査地西側中央付近にあり，第15号住居址を切る。プランは主軸5.54m・東西軸5.90mを測る隅丸胴張方形で，主軸がN-4°-Eの方向を指す。壁は直に近く掘り込まれ各壁とも20～30cmの深さになる。床面は砂利層にあたり堅く平坦である。カマドは北壁中央付近に設けられ，軸間60cm・奥行30cmと比較的小さなものである。

遺物はカマドを中心として出土したが，その量は多くない。器種として坏・高坏・甕形土器等があり，全形を知りうるものはない。石製品として孔が貫通しない軽石製の紡錘車の未製品が出土している。

4. 第4号住居址（第6図，第7図版）

本住居址は大部分が調査区域外にかかり，全容を知り得ないが，方形プランを呈すると思われる。壁高は北壁が21cm，東壁が11cmをはかる。床面は砂利層になり軟弱で平坦である。柱穴やカマドなどの施設はみられなかった。

遺物の出土は少なく，床面よりやや浮いて出土している。確認できた器種は土師器坏・甕形土器体部片のみである。坏は碗形を呈するものでヘラミガキが施される。

5. 第5号住居址（第6図，第7図版）

第4号住居址と同様に区域外にかかっているため，全容は明らかでないが，方形プランを呈するであろう。壁高は15cm前後である。カマドなどの施設は検出できなかった。

遺物は床面に接して，碗形で内面が黒色を呈する坏形土器1点を採集したのみである。

6. 第6号住居址（第6・18・27図，第8・34図版）

第8号住居址の西側のややなれたところに単独で存在し，北壁4.72m・東壁2.86mの長方形のプランを呈する。カマド・焼土はなかった。各コーナーは丸味を帯びており，壁はほぼ垂直で24～30cm前後の高さになる。床面は砂質を掘り込んでおり，小石が多くみられるが平坦である。柱穴は検出されておらず，西側には長軸1.16mほどの浅い凹みがある。この他南壁近くに扁平で細長い大きな自然石が一個置かれている。

遺物の出土はほぼ全体から出土しており，北壁のやや東よりから口縁部がわずかに外反する鳥帽子形の甕形土器が立てられた状態で出土した他は覆土からのものが多い。この他甕形土器には肩上部で段をなし，口縁部がゆるく外反するものとくの字形に外開するものがある。坏形土器は碗形で底部がヘラケズリされるものとヘラミガキされるものがある。甕形土器は口縁部が屈開し浅くラップ状になるものが出土している。埴形土器は口縁部が短かく屈開し，体部が扁平になるものが1点出土した，この他破片で高坏形土器がある。覆土中より滑石製紡錘車が1点出土した。

7. 第7号住居址 (第6・19図, 第9・10図版)

調査区域西側に存在し、土壌1によって西壁を切られており、溝2を切っている。プランは西壁4.54m・北壁4.05mのやま長方形に近い形を呈し、主軸方向はN-15°-Eを指す。壁は傾斜を有し15~27cmの掘り込みである。カマドは北壁中央に設けられ、南北に80cm・東西に50cmの範囲で焼土が散布しており、長さ52cm・幅17cmの自然石が残存し、破壊されているが軸石を有する両袖形のもので推定される。床面は黄褐色砂層を掘り込んでおり、凹凸がある。柱穴は4個方形配列で検出され、径15~19cm・深さ15~17cmを測る。

遺物はカマドの周辺から出土しているのみで、円筒形土器が自然石と並行するように出土している。この土器は体部下半でわずかにこける他、口縁部まで直線的で、底部が平底で中央が凹凸器形になる。内面に傾積成形痕・指痕による圧痕を顕著に残す。この他土器器坏・甕形土器片が出土しているにすぎない。

8. 第8号住居址 (第7・19図, 第11図版)

本住居址は、第1・2次調査により検出したもので、東南部が採土のため破壊される。第12号住居址をきり、第17号住居址によってきられ、土壌によってカマドの一部が破壊される。カマドは北壁のほぼ中央につくられており、主軸方向はN-3°-Wである。プランは西壁10.30m・北壁9.60mをはかる大形の正方形に近い形を呈している。コーナーはほぼ直角に近く、壁高は17~20cmをはかるが、南壁は5cmと浅く、ほぼ垂直に床面からたちあがっている。床面は黄褐色砂層を掘り込んでおり、堅く平坦である。柱穴は4個検出されたが、方形配列6本柱が想定される。P₁は径37cm・深さ16cm, P₂は径30cm・深さ15cm, P₃は径50cm・深さ35cm, P₄は径30cm・深さ15cmをはかる。カマドは粘土製両袖形であるが、土壌2によって右袖部が破壊される。焼土の範囲は南北63cm・東西60cmをはかる。

遺物の出土量は少なく、土器土器片が床面から出土したのみである。なお、床面上まで後世の擾乱がみられ、近世の陶器が床面近くより出土した。器種として坏、高坏、甕形土器がある。

9. 第9号住居址 (第8・18・28図, 第12・35図版)

本住居址は発掘区域南側にあり、第24号住居址をきり、第8号住居址に隣接する。北東隅は後世の擾乱によって破壊される。プランは西壁6.35m・南壁4.26mの規模のほぼ長方形に近い形を呈する。コーナーは北西隅と南西隅が丸味を帯びているが、南東隅は、ほぼ直角に近い。カマドは東壁の中央やや南よりに設けられるが、袖部は確認できず、焼土のみ残存するにすぎない。掘道は巾20cm・長さ82cmをはかる。主軸方向はN-61°-Eである。壁高は22~31cmを測り、やや傾斜をもつ。床面は黄褐色砂層を掘り込んでおり平坦である。柱穴はない。

遺物はカマドの周辺に集中しており、甕形土器・高坏形土器・坏形土器が出土している。南

側より鉢形土器・鉄製刀子が出土している。また、南西隅より長さ20cm・巾8cmほどの自然石が13個集中して出土した。坏形土器は碗形で平底のもので、成形痕を残すものもある。高坏形土器は皿形の坏部にラッパ状の脚部がつく。鉢形土器は口縁部が内湾する球形のもので、平底になる。甕形土器は口縁部が外反し体部が直線的な器形で、最大径は口縁部にある。この他覆土中より内面にかえりのある須恵器蓋形土器が1点出土した。

10. 第10号住居址（第9・18・28図，第13・36・40図版）

第11・14号住居址の西側に隣接し、単独で存在する。南壁2.05m・東壁2.57mのやや長方形に近いプランになる小形の住居址である。カマドはなく、焼土も検出することができなかった。壁はほぼ垂直であり、20cm～26cmほどの高さである。床面は黄褐色砂層を掘り込んでおり、小石が多く凹凸がある。柱穴はない。

遺物は住居址の南側より床面からやや浮くように、土器器羽釜形土器・坏形土器が集中して出土した他、亀の子形の鉄滓塊などが出土している。坏形土器には2種あり、平底のものとのハの字形の高台がつくものであり、共に底部に糸切り痕を有する。羽釜形土器は口径に比し器高の高いもので、胴下はヘラ削りが施こされる。

11. 第11号住居址（第9・20・27図，第13・36図版）

調査地のほぼ中央に第14号住居址をきって存在する。プランは東壁3.61m・南壁3.47mのほぼ正方形になり、N-95°Eに主軸をとる。住居址北東隅には火を受けた自然石が残存しており、カマドの残欠と思われ、焼土がその周辺に散在する。北東隅のコーナーはやや丸味を帯びているが、他のコーナーは、ほぼ直角である。壁はほぼ垂直にたちあがっており、25～32cmの高さをはかる。床面は軟弱で凹凸がみられる。柱穴はない。

遺物はカマドの西側に集中して存在しており、土器器皿形土器・坏形土器が多くみられる。ほとんどの遺物と石は床面から10cm以上浮いて出土した。体部が直線的に外開する皿形の高台付もしくは盤形の器形になると思われる。坏形のもの小形のもの碗形の高台を有するものがあり、小形のものの中には口縁部付近に油煙が残り燈明皿と考えられるものもある。甕形土器にクロコ目が残り、口縁部がわずかに外反し、最大径が体部上半にある。灰釉陶器も2個体出土しており、高台のつく皿形のもの碗形のものである。この他脚皿及び砥石が出土している。

12. 第12号住居址（第9・20・21図，第14・37図版）

調査地のほぼ中央に位置し、第1次調査では西壁が未調査で、第2次調査で全容を明らかにすることができた住居址であるが、南東隅の一部が採土により破壊を受ける。プランは主軸がN-10°Eを指し、主軸6.00m・東西軸6.73mの規模の隅丸方形を呈する。壁は黄褐色砂質土層を掘り込んでいるため、くずれによる傾斜があり、13～19cmの深さになる。床面は平坦

で軟弱である。カマドは北壁中央に設けられた主軸1.2m・袖間1.0mの規模の粘土製両袖形のものである。内は焼土で埋まり、壁まで焼土化していたが煙道は明確でなかった。袖部前面に棒状の自然石がへらの字状に置かれ、焚口の施設と考えられる。柱穴は認められなかった。

遺物は完形品に近いものはカマド周辺から出土している他は、破片で遺構全域からみられた。覆土上部からは平安時代に比定される土器の混入がみられた。器種には椀形の坏部にラッパ状の短かい脚が付くものと筒形になる高坏形土器、椀形で平底に近くなる器形の坏形土器、口縁部がゆるく外反し、筒形と丸味をもつ体部になる甕形土器、椀形の鉢形土器及び口縁部が短かくわずかに外反する筒形土器があり、須恵器甕形土器が混入する。筒形土器はカマド前面の出土であり、内面に輪横成形痕・指頭整形痕を残す。須恵器甕形土器は口縁部が折り返えり、体部外面に叩き目・内面に青海波文を残す。床面近くの出土であるが、後出のものかもしれない。

13. 第13号住居址 (第10・21・22・27・28図, 第15・37図版)

調査区域中央に第11号住居址に隣接して存在する。プランは西壁9.91m・北壁8.82mをはかり、ほぼ正方形に近い形を呈する。主軸方向はN-25°-Wである。カマドは東南隅近くの東壁に存在する。各コーナーはやや丸味をもち、東壁・西壁はやや張り出し気味である。壁高は28~36cmをはかり、やや傾斜を有する。床面は黄褐色砂層を掘り込んでおり、全体に軟弱で平垣である。柱穴は北西隅に径20cm・深さ5cmのものが1個あるのみである。径80cmほどの範囲の焼土と、5個の自然石が残存する。支脚石を有する粘土製両袖形である。

遺物はカマドの周辺より多数出土しており、土器甕形土器・坏形土器・灰釉陶器などが出土している。他に土製の羽口・鉄製刀子などが出土している。坏形土器は底部に糸切り痕を残し、内面黒色処理されたものが多い。甕形土器はロクロ成(整)形されたもので、内外面にロクロ目を残し、中には内面にカキ目を残すものがある。器内は薄く口縁部が内弯気味に外開することを特色としている。

14. 第14号住居址 (第10・22図, 第16・38図版)

調査区域中央に第11号住居址にきられて存在する。プランは東壁4.17m・南壁4.37mのほぼ正方形に近い形を呈する。カマドは明瞭でなく、北東壁近くに90cm×60cmの焼土塊がみられる。他の施設は認められない。各コーナーは丸味を帯びており、壁高は17cm~30cmで、ほぼ垂直にたちあがっている。床面は砂質で平垣ではあるが、軟弱である。柱穴はない。

遺物は住居址内の北西隅付近から集中して出土したが、その状態は床面から20cm程ういていた。土器坏形土器が多く、糸切り平底のものと高台付のものがある。灰釉陶器が1点出土し、つくり出し高台である。

15. 第15号住居址 (第10図, 第16図版)

本住居址は第3号住居址によって南側をきられている。プランは北壁3.40mのほぼ正方形に近い形を呈しているが、南壁を失っているためはっきりしない。各コーナはほぼ直角であり、壁高16~29cmを測り、ほぼ垂直に立ちあがる。床面は小石が多くみられ、凹凸がある。カマドや柱穴等の施設や掘土などはみられなかった。

遺物は破片で覆土中にみられたが、その出土量は非常に少なく、器種としては土師器坏・甕形土器である。

16. 第16号住居址 (第11・23・28図, 第17・38図版)

本住居址は第13号住居址によってきられ、第18号住居址が先行する。プランは北壁3.96m・東壁5.64mの長方形に近い形を呈するが、東壁はやや外側に張り出している。主軸方向はN-87°-Eである。壁高は23cm~35cmで、ほぼ垂直に床面から立ちあがっている。床面は黄褐色砂層を掘り込んでおり、軟弱で平坦である。カマドは北壁のほぼ中央につくられている。柱穴は南東寄りに1個検出され、径40cm・深さ6cmをはかる。カマドは粘土製兩袖形と考えられ、調査時においては左袖部のみ残存する。煙道は巾8cm・長さ108cmのU字状形である。

遺物は住居址の全体にわたって出土しているが、カマド周辺からはそれほど多くない。ただ図示できるものは皿形の坏部と円筒形の脚を有する高坏形土器と碗形・丸底の坏形土器のみである。他の器形にくの字形に外反する口縁部をもつ甕形土器がある。この他鉄製品として、刀子片2点・くの字形におれた片面に刃を有する用途不明なものがある。

17. 第17号住居址 (第7・23図, 第17・38図版)

第8号住居址南西隅に内包される南北軸2.38m・東西3.50mの不整形を呈する小形の住居址である。掘り込みは西壁で22cmをはかる。床面は平坦で軟弱である。カマドは北壁に設けられたものと思われ、壁下に焼土を残し、甕形土器が直立する。柱穴は確認できなかった。

遺物の出土量は少なく、口縁部がわずかに外反する長胴の甕形土器の他、碗形で丸底の坏形土器が出土しているにすぎない。高坏形土器片の中に内面黒色処理されたものもある。

18. 第18号住居址 (第11・23図, 第18図版)

本住居址はビット群の西側に位置し、第16号住居址を調査している際に発見されたもので、第16号住居址より先行する。プランは明確につかめなかったが、東壁3.90m・南壁1.78mの隅丸長方形に近いプランになるものと思われる。壁高は20~25cmで、ほぼ垂直に床面から立ちあがっている。床面は軟弱で平坦である。

遺物は東壁中央部付近から、土師器甕形土器・坏形土器が集中して出土するが、ほとんどが床面より10cm程浮いている。坏形土器は底部に承切り痕を残し、比較的浅く皿形を呈し、内

面は黒色を呈するものが多い。甕形土器もロクロ成（整）形され、ロクロ目あるいはカキ目を残す。最大径は口縁部にある。

19. 第19号住居址（第11図、第18図版）

調査地東側の緩傾斜面にあり、第21号住居址に隣接する。住居址北半分が調査区域外にあり、南側のみの検出である。プランは南西隅の張る不整隅丸方形を呈すると思われる。規模は東西軸2.5mで南北軸は不明である。掘り込みは直く近く、床面が地形に沿って傾斜しているため、西壁12cm・東壁15cmをはかる。覆土に小礫が散在し、その間に遺物が混る。柱穴・カマド等の施設はなかった。

遺物の出土量は少なく、ほとんどが破片で図示できるものはない。器種として碗形の坏形土器と甕形土器がある。

20. 第20号住居址（第11・23図、第19図版）

調査地東傾斜面から確認した住居址で、覆土及び床面の黒色土の混入から先年長沢千秋氏が発見した住居址の可能性がある。プランは東西軸3.80m・南北軸3.25mの隅丸方形を呈し、長軸方向がS-15°-Wを指す。壁は直に近く、19~28cmの掘り込みである。床面は平坦で軟弱である。柱穴・カマド等の施設はなかった。

遺物の出土は覆土に限られ、みるべき遺物は坏形・丸底の坏形土器1点のみである。他に甕形土器片が若干ある。

21. 第21号住居址（第12・24図、第19・38図版）

本住居址は大部分が調査区域外にかかるため、住居址の全容は把握できなかったが、南壁隅はやや丸味をもっている不整形を呈するものと思われる。壁高は10~12cmで、ほぼ垂直に床面より立ちあがっている。カマドは明確に把握することはできなかったが、東壁沿いに大きな石が集中しており、粘土製両袖形のカマドと思われる。

遺物は住居址内の全面にわたってみられ、床面から10cm程浮いて、灰軸陶器・土師器坏形土器・甕形土器が出土している。坏形土器には糸切り痕が残り、皿形のものや碗形のものがあるが概して浅い。灰軸陶器は低い高台を有する碗形のもので、薄く釉が施こされる。

22. 第22号住居址（第12図、第20・21図版）

本住居址は第1・2次調査で検出したもので、第23号住居址、土壁4・5をきる。プランは、北壁4.12m・東壁4.42mをはかる。東壁がやや張り出した隅丸方形に近い形を呈する。主軸方向はN-21°-Wである。カマドは北壁のほぼ中央に設けられているが、調査時では破壊を受け、壁及びその直下に巾44cmの範囲で焼土が認められたにすぎない。煙道は巾18cm・長さ55cmのU字状になる。壁高は34~44cmでやや傾斜をもって立ちあがっている。床面は軟弱

で平坦である。なお柱穴はみられない。

遺物の出土量は少なく、覆土中より坏形・甕形土器片を得たのみで、図示できるものはない。

23. 第23号住居址（第12・24・25図，第20・21・40図版）

本住居址も第1，2次調査で検出したもので，東側を第22号住居址によってきられ，南側で第28号住居址を切り，土塙8を内包する。壁高は31cm前後で，ほぼ垂直に床面に続いている。床面は砂質層で軟弱であり平坦になる。柱穴・カマドはなかったが，中央よりやや北西の位置に自然石の立石が認められた。

遺物は床面に密着して，土器器把手付甕形土器が1点出土している他覆土中からのものが多い。把手付甕形土器は口縁部がくの字形に外反し，最大径が体部中位にある球形の甕形土器に把手の付されたもので，その整形は甕形土器に似る。この他皿形土器，碗形の器坏形土器，円筒形の脚を有する高坏形土器が出土している。

24. 第24号住居址（第8図，第12図版）

本住居址は第9号住居址と溝状遺構によってきられている。そのため大部分は失っているが，西壁3.60m・北壁3.00mのやや隅が張った隅丸長方形に近いプランを呈するものと思われる。壁高18～21cmで床面から垂直にたちあがっている。床面は砂質で軟弱であり平坦である。カマドや柱穴などの施設や，焼土の分布はみられなかった。

遺物は覆土から出土した坏・甕形土器の破片若干量にすぎない。

25. 第25号住居址（第13図，第22図版）

本住居址は調査区域東側に，南西隅を第26号住居址と重複する。プランは北壁4.90m・東壁4.50mをはかる。ほぼ隅丸方形に近い形を呈する。壁は10～15cmでほぼ垂直にたちあがっている。床面は黄褐色砂層を掘り込んでおり，軟弱で平坦である。柱穴は北東隅に1個みられ，径35cm・深さ4cmをはかる。焼土は南東隅付近に浮いた状態で確認された他カマドの痕跡はない。

遺物は九底を呈すると思われる坏形土器片及び甕形土器体部片を得たにすぎない。

26. 第26号住居址（第13・24図，第22図版）

本住居址は第25号住居址と重複する。プランは西壁5.52m・南壁4.81mの隅丸長方形を呈するが，東壁の北半分はやや外側に張り出す。壁高は10cm～20cmをはかり，床面からやや傾斜をもってたちあがっている。床面は黄褐色砂層を掘り込んでおり，軟弱で平坦である。カマドや柱穴などの施設はみられなかった。

遺物は北壁近くに集中してみられたが，そのほとんどが甕形土器の破片である。ただ図示できるものは口縁部がわずかに外反する深めの坏形土器1点のみである。

27. 第27号住居址（第14図，第22図版）

調査地東端に位置し，南壁は区域外にある。プランは東西軸が2.80mをはかる隅丸方形を呈し，東西軸はN-75°-Eにある。壁は直に近く，北壁11cm・東壁15cm・西壁26cmの深さになる。床面は平坦で軟弱である。柱穴は各壁隅より3個確認され，径50cm・深さ6~38cmの規模のものである。カマドの痕跡はなかった。

遺物の出土量は少なく，そのほとんどが内面黒色を呈する丸底の坏形土器片である。

28. 第28号住居址（第12・25図，第23図版）

第2次調査で検出した住居址で，第23号住居址より新しい。プランは東南隅が鋭角になる不整形方形を呈し，東西軸5.80m・南北軸5.16mを測る。床面は軟弱で平坦である。壁は直に近く，15~25cmの掘り込みになる。この他中央付近に自然石が認められた他，柱穴・カマド等の施設は確認できなかった。

遺物の出土量は少なく，その出土も覆土中からのものが多い。甕形土器には口縁部がゆるく外反し体部がヘラケズリされるものと口縁部が内湾気味でロクロ成（整）形されたものがある。坏形土器は糸切り痕が残り内面黒色処理される。

29. 第29号住居址（第14・25図，第23図版）

第2次調査で確認されたもので，第8号住居址の南にあり，その新旧関係は北壁が採土による擾乱で破壊を受けるため不明である。溝3により切られる。プランは東西軸4.56mをはかる方形を呈するものと思われる。壁は直に掘られ，その深さは15~18cmの範囲にある。床面は平坦で軟弱である。住居址中央付近に床面より5~10cm浮いて自然石の集中箇所がみられた他，柱穴・カマド等は確認できなかった。

遺物の出土量は少なく，碗形で内面黒色を呈する坏形土器の他，甕形土器片を得たのみである。

30. 第30号住居址（第15・25・27図，第24図版）

第2次調査で検出したもので，住居址南半分は調査区域外にある。プランは胴張りの方形を呈するものと思われる。東西軸7.84mで，壁高は24~40cmの範囲にある。床面は砂利層になり平坦である。柱穴は北西・北東各隅に2ヶ確認され，4ヶ方形配列になるとと思われる。規模は径60・76cm，深さ30cm・28cmである。カマドは確認されないが，北壁中央下に灰土を伴う扁平石の集石が認められ，その周辺より甕形土器片が集中していた。

遺物の出土量は少ない。甕形土器には肩部に段をなし，口縁部がわずかに外反し長胴で底部が丸味を有するものと口縁部がくの字状に大きく外開する2種がある。坏形土器は碗形で内面黒色を呈する。この他短頸の壺形土器，須恵器横瓶口縁部付近の破片が覆土中より出土した。

第2節 柱穴群（第17・26図、第26・39図版）

第18・20号住居址にはさまれた地点で東緩斜面上に集中してある。規模は径45～60cm・深さ8～35cmの範囲にあり、柱穴としては割合しっかりしている。ただ数の多い割には建物址として想定できる直配列になるものはない。

遺物は土師器杯・菱形土器片がわずかに出土しているにすぎないが、北側のものから須恵器の短頸増形土器が出土している。

第3節 土 壙

柱穴あるいは住居址と考えられない一群を本節であつかい、その意味するところは様でない。

1. 土壙1（第15図、第25図版）

第7号住居址の南西隅と重複し、第7号住居址より先行する。長軸がN-11°-Eを指すU字形底の長楕円形を呈するプランになる。その規模は主軸3.20m・短軸1.15mで、最も深いところで30cmを測る。遺物の出土はなかった。

2. 土壙2（第15図）

第8号住居址のカマド左袖をこわしてつくられたもので、第8・12号住居址より先行する。プランは径1.05mの円形で、深さ70cmを測る。周囲は青灰色粘土が厚さ約5cmに貼られ、底面には拳大から小児頭大の河原石・角礫が配される。覆土は黒褐色砂質土で土師器杯・菱形土器片が認められた他炭化物等の混入はない。用途については井戸址とも考えたが、微高地上にありまた深さがない点湧水を求め得ないと思われ、逆に排水用と考えた方が妥当かもしれない。年代については後述する集石址確認面と同じ層から検出したもので、近世に近い時期が求められる。

3. 土壙3（第15図、第26図版）

柱穴群中にあり、長軸1.85m・短軸1.2mの不整楕円（方形）のプランで、床面は平坦になる。出土遺物はなく時期不明であるが、柱穴群より後出の遺構である。

4. 土壙4（第16・26図、第26図版）

第22号住居址の北側、土壙5と隣接する位置にある。プランは長軸1.8m・短軸1.1mの楕円形を呈するが南西部は第22号住居址によって切られている。壁は直に近く、20cmを測り、底

面は平坦である。遺物は甕・高坏形土器片が覆土中より床面にかけ出土した。

5. 土壇5 (第16・26図, 第27・39図版)

プランは第22号住居址により南半が切られ長軸の規模は確かでないが、1.6mと推定され、短軸0.93mの楕円形を呈する。壁は直に近く、深さ54cmをはかり。底面は平坦である。

遺物は南東隅付近より床面直上から甕形土器1点、埴形土器2点(うち1点は墓内出土)高坏形土器器部1点が出土した他、人頭大の自然石3ヶを確認した。他からの遺物の出土はない。

6. 土壇6 (第28図版)

第22号住居址東側の緩傾斜面にある。主軸1.6m・短軸0.96mの不整形プランを呈する。壁は直に近く、18cmをはかり、底面は平坦になる。出土遺物はなく、時期不明である。

7. 土壇7 (第28図版)

土壇6の東側に位置し、主軸72cm・短軸60cm・深さ15cmの不整形円形を呈する。覆土中よりの出土遺物はなく、時期不明である。

8. 土壇8 (第14図, 第21・29図版)

第23号住居址内にあり、住居址より先行する。主軸2.3m・短軸1.52mの不整形プランを呈する。壁は緩傾斜を有し、19cmの深さになる。覆土上部より鹿と推定される獣骨片が出土した他、土師器土器片のみである。

第4節 溝 址

1. 溝1 (第16図, 第28図版)

調査地微高地を東西方形に形成するU字溝で、巾1.15m・深さ35cmをはかり、西から東に流路をとる。溝の埋土は黒褐色土及びそれに近い砂層であるが、頻繁に使用された形跡はない。遺物の出土はなく、時期不明である。

2. 溝2 (第16図, 第28図版)

溝1と同方向の流路をとるが、第9号住居址の前前で3方に分かれ複雑な流路になり、先端は行き止まる。底面は一定、平坦でなく凹凸がある。規模は巾30~92cm・深さ9~21cmである。覆土及び形状から人工的であろうが、通状の溝とは考えられない。時期は第7号住居址を切っており、それより後出のものであるが、確たる出土遺物がないので不明である。

3. 溝3 (第14図, 第23図版)

第9号住居址の東, 第29号住居址の南西隅付近を切て存在する。溝方向は東西で, 長さ5.72m・巾66cm・深さ15cmのU字溝である。時期, 用途等は不明である。

第5節 集石址 (第28図版)

第8号住居址の上部, 土墳2の東側にあった遺構で, 長楕円の河原石を配したものと, 雑然と集石されたのがある。この確認レベルから焼土の散在が各所に認められ, それらのものと関係する遺構と考えられるが, 何を意味しているか不明である。ちなみにこの付近から近世陶器が出土していることから, この時期の何らかの遺構の部分であろう。

第6節 その他の遺物 (第26・27図, 第39~41図版)

ここではグリットを中心としたもので, 遺構出土以外のものをあつかう。

弥生時代後期の変形土器片が2点出土しているが, 磨耗が著しく, わずかに櫛状工具による波状文の痕跡がうかがえる程度のものである。古墳~平安時代の土器は住居址等遺構が多数検出されている割には出土量が少なく, またそのほとんどが破片で全形を知り得るも高杯形土器1点にすぎない。これにたいし内耳付土器・磁器を含む中・近世のものが前者のそれを凌駕する程である。特に内耳付土器の完形品は遺構に伴わずに包含層からの出土で, その出土状態は正位であった。検出時には中央付近に力が入ったらしく, 放射状にわれていた。この破壊以前にわれていたようで, 底部に2ヶ所・腰部に2ヶ所の補修孔がうがたれており, そこを角ばった細い銅線で緊縛してあった。土製品としては断面台形の紡錘車を得, 石製品として砥石, 葦石状の円板石が出土した。鉄製品は丸味をもつ角釘様のもの火打ち金具状のものが出土しているが, いずれも時期不明である。

第7節 他地点の調査

1. B地点 (小島田農協裏) の調査

本遺跡と本田面をはさんで対峙する北側微高地上にも集落址の可能性があったので, 農協裏のバイパス計画路線地内を存在有無の確認のため主軸線に沿って3m間隔に6個の試験ピットをあげた。その結果各ピットとも表土下が茶褐色粘土層になり, 約1.6mで砂利層に至る。粘土層は非常に強く, 間層は認められず, 遺物の包含はなかった。このため, この地点において遺跡の存在はなかったものと判断し調査を打ちきった。

2. 水田地の調査

微高地下約2m, 北東に展開する現水田の調査で, 本遺跡の生産址を求める目的で行なわれた。調査は道路主軸を中心に左右に計3本の3×30mトレンチを設定し, 3m間隔で調査をした。この結果各ビットとも現水田下にさらに2層の水田面があることが確認され, 最下層は約1.5mで砂利層に至る。現水田の耕土は床面で28cmをはかり, 56cm下にさらに42cm下に鉄分を多く含んだ厚さ5cm程の沈澱層があり, 水田の床面であることは間違いなからうが, 水田址の規模については確認できなかった。この床面との間層は茶褐色を呈する粘質土層になる。ただこれらの年代を想定させる出土遺物がないので, 各水田址と本遺跡遺構と直接結びつけることができないが, 生産地を現水田面であるこの凹地に求めることができる十分な資料であると考えられる。

第8節 土層序 (第3図版)

水田地及びB地点の主堆積土が茶褐色粘質土であるのたいし, 遺構がある微高地上のものは趣きを異にする。地表下約1.9mまで土層観察用ビットをうがったのであるが, その主成分は黄褐色の砂層であった。表土(耕土)約15cmが第1層でそれ以下第2層に黒褐色の砂質土(約25cm), 第3層に砂利混り黄褐色層(約35cm), 第4層に黄褐色砂層(約30cm)第5層に礫混り白褐色砂層になり1.9m下まで続く。遺物包含層は第1・2層であるが, 微高地頂部で薄く北東斜面手前付近が最も厚く約60cmをはかる。遺構確認面はその下第3層からで, 大部分の遺構はこの土層内にある。第5層には約10cmの厚さで2層の砂のみの間層がみられた。

これらの土層の主成分である砂は花崗岩によるもので, 犀川水系のたび重なる洪水による堆積のなせるわざと考えられる。

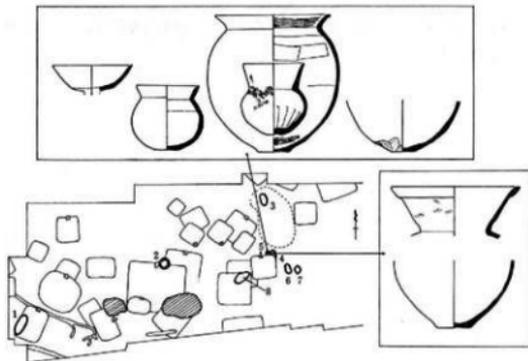
第4章 結 語

—田中沖遺跡調査の提起するもの—

田中沖遺跡の緊急調査をかえりみてその提起する諸問題について総括しておきたい。まず、この調査によって得られた資料中、遺構と確実に伴った最も古い資料は第4—1図に示めたように、第5号土壇出土の土師器である。この問題は土壇という特殊な問題であることに注意しなければならない。つぎに、第4—2図に示めた古墳時代後期を主体とする資料群であり、その三は、第4—3図にみるような平安時代後半にかかる資料群の問題である。その四は、第4—4図にみられるように、第11号住居址出土の一括土器にかかわるものであるが、それは、とくに蹴脚付羽釜をめぐる問題であることは言うまでもない。そして特に平安時代後半における川中島平の社会構造的問題をみておくことが必要であるように思う。

第1節 土壇に伴う資料群

第4・5号土壇から、第4—1図に示したような第2様式後半に属するものと思われる資料が得られている。第4号土壇からは、折り返えし口縁のある、有段口縁の甕形土器が得られた。強く屈曲する球形胴部をもつものと思われるが、その整形にはこまかいハケメがみられる。一応、第2様式末（5世紀末葉）とすることができよう。胴部下半の資料は、やや胴部が



第4—1図 土壇出土の遺物群

のびかかったもので、同様第2様式末葉とすることができよう。したがって、この第4号土壌は六世紀には入らない時期のものともておきたい。

第4号土壌と西に並んで、第5号土壌がある。第5号土壌は、第4号土壌よりやや小形のものともてよく、その平面プランなどほとんど同様のものである。この一括資料には、いわゆる西からのアプローチとしての小形丸底土器が出土している。大和連合政権の祭祀権を象徴するかのような、この小形丸底土器と小形有孔器台形土器（この土壌からは出土していない）は、その分布の拡大と、大和祭祀権の拡大と、その大和政権力の拡大定着と相関関係の中で理解されてきたものである。それは4世紀初頭からしだいに浸透、増殖を拡大してきたもので、5世紀に入って有孔器台の減少消滅、小形丸底の大形化が進行すると同時に、高杯形土器の増加となる。その一連現象の中で、大形化してきた小形丸底土器の一形態とみるのが可能である。有段高杯の存在、そして口縁横まで、内面底部のハケメ痕をもつ球形胴部の甕形土器は、やはり、この時期まで下りてくるものであろう。

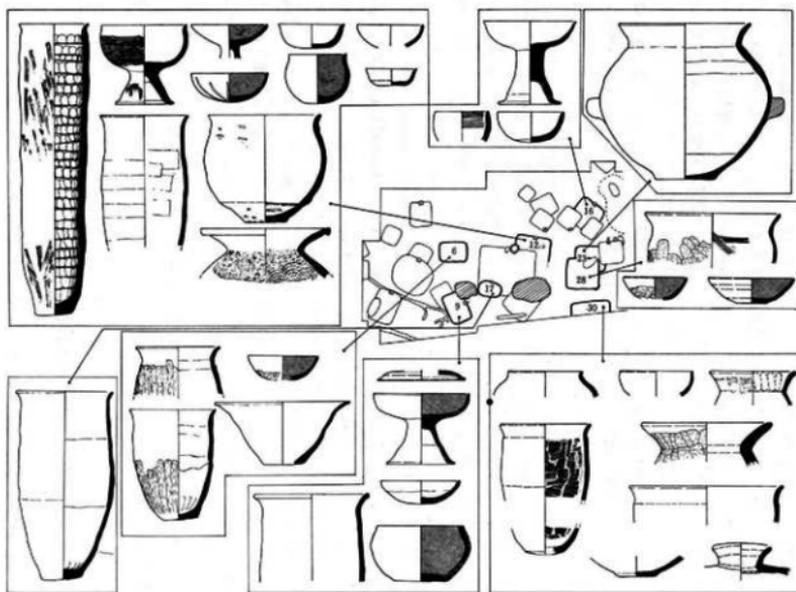
しかも注意されるのは、この甕形土器の内部に小形丸底土器が収納されるように内蔵されていたことである。こうした出土例は、必ずしも多くない。甕形土器内に、杯形土器が逆位で伏せられて、いわば、内容物にあたかもふたをしたかのようにして出土する例は、住居址内において散見することができるが、土壌内の甕形土器に、小形丸底土器が収められていたという例は、管見では長野市駒沢新町祭祀遺跡の第1号址にある。この行為が、この土壌の性格を表現しているであろうが、類例の少ないことには、論証としては推論をはるかに超えている。しかし、土壌、甕形土器内蔵の小形丸底土器は、祭祀形態と思われる駒沢新町第1号址例を合わせると、やはり、完形埋納も状況としては同様であることを思えば、たとえ、駒沢例のように他の祭祀遺物は伴っていないが、一応同様な事例と考えてよいものと思うものである。駒沢例も、一応農耕祭祀にかかわる5世紀初葉から中葉にかけての資料群であるので、本田中沖例よりは若干先行するものであるが、ほぼ同様様式内にある資料群である。それと関連させれば、この本田中沖例も、農耕祭祀の埋納土壌として注目されるべき資料と言えるであろう。類例の増加を待ちたい。

なお、1～3・6～8の土壌については、土器の破片などの小片が混入している程度であって、その性格を特定することは困難である。しかし、中世にくだる埋葬土壌と見られるものが大部分であろう。

第2節 古墳時代後期の資料群

川中島扇状地における古墳時代遺跡群については、かなり注意されるべき課題がある。

それは、すでにその地理的、歴史的環境として検討してきたところであるが、いわゆる大室古墳群と対応する農業生産面及び集落面は、この川中島扇状地内にあるという把握を妥当とするのであるから、その川中島扇状地内の遺跡、とりわけ古墳時代の遺跡群には看過できない重要な課題があると言わなければならない。その遺跡密度は、前期的な有力な巨大古墳の存在しない



第4-2図 古墳時代を中心とした住居址に伴う遺物群

ことをみると、弥生時代の生産には、もう一つ開拓のゆきとどかぬところがあったとみるべきである。まだその生産の高まりは、屋代兩宮地域と、塩崎地域の安定した後背湿地をもつ弥生時代の歴史的空間に追いつけなかったとみるべきであろう。しかし、その開発の進度は次第に増大し、やがて、その生産は、弥生時代から古墳時代前期にゆきついた屋代兩宮沖積面と塩崎沖積面を抜いて加速度的に高まったに違いない。その余剰生産力は、古墳の築造へと向いてやがて大古墳群の造成をなしとげるまでに至ったとみることができる。そこにはまさに、巨大な余剰生産力の蓄積がなくてはならない。また、農業人口の密集、農耕地の安定、それに附属する工人集団の存在、そしてそれらを統括する社会支配構造の存在を肯定すべきであろう。そうしたものなくして大星山前方後円墳を主墳とする500基に及ぶ大古墳群が、5世紀中葉以降、7世紀末に至る250年間に築造されたとする背景を理解することはできない。

第4—2図に示した遺物群は、明確にその時期に入る遺物群であって、しかも住居址内から検出された確実な資料である。

第23号住居址から得られた把手付壺形土器を最も古い資料とするが、球形胴の壺形土器に把手を付けるというこの種の資料の中で古手に属するものとみてよい。他の遺物については明らかでない。しかし住居址は、第28号住居址によって切られているので、第28号住居址の方が新しい資料である。

第12・30・16・17号住居址そしてややくだった第9号住居址出土の資料群などは、ほぼ同一時期のものと思われるものである。丸底の坏群を特徴とし、第Ⅲ期後半の須恵器を伴っている。甕胴部、高坏脚部のヘラによるけずりが出てきている。しかし、甕もかなり長胴化し、そのふらみをいぢるしく失っているのをみると、第4様式に入るものとも見れるが、伴出資料群はむしろ古く、第3様式後葉（7世紀後半）としておきたい。

第6・28号住居址がこれに次ぐものであろう。坏底部にいたるケズリ、そして、第28号住居址のロクロ成形ヘラオコシの坏の存在をみると、第6号住居址よりもう1つ新しいかもしれない。第3様式終末期あるいは、第4様式に属する資料としておきたい。

古墳時代後半資料をみると、Ⅰとして第23号住居址、Ⅱとして第12・30・16・17号住居址、Ⅲ重として第9号住居址、Ⅳとして第6号住居址、Ⅴ重として第28号住居址という展開になるものと思われる。

- Ⅰ（第23号住居址）第3様式初頭：6世紀
- Ⅱ（第12・30・16・17号住居址）第3様式後葉：7世紀後半
- Ⅲ重（第9号住居址）第3様式末葉：7世紀末
- Ⅳ（第6号住居址）第3様式終末：7世紀末
- Ⅴ（重第28号住居址）第4様式初頭：8世紀初頭

住居址の平面のちらばり、その平面プランの主軸方向などにも若干の関連性があることを読める。これは当然集落の構成上の制約の存在、選択の存在につながるものと言えるであろう。こうしたこまかい編年の可能性は、沖積地の中洲集落の特長であろうか。これを不安定とみる

必要はない。屋代沖積面や塩崎沖積面においても、まったく同様な遺構残存状況をしめしているからである。沖積地の宿命と言うべきであろう。それでもなお、そこが生産性の高い優秀なエリアであったとみるべきであろう。

大室古墳群築造社会の集落を垣間みたにすぎないが、しかし、当然ばく大な集落遺構、生産址の埋蔵を更に積極的に仮定できることとなった重要な所見と言うべきである。

第3節 平安時代後半期の資料群

ここでとり上げた資料群は、ほぼ12世紀、第5様式末葉に位置づけるものである。12世紀における川中島扇状地一帯は、伊勢神宮領であった。横田を中心とする藤原御厨、戸部を中心とする北部の富部御厨、そして西域を中心とする布施御厨であった。これらは「吾妻鏡」や「神祇抄」などに初現する。ここが「倭名抄」の郷名に出る3郷が、やがてそれぞれの御厨へと転換した根底には、ここがいわゆる地方豪族の拠点であり、そしてその拠点を神宮領へと寄進することによって、荘園化をはかったものであることは明らかであるように思う。そしてここがいわゆる伊勢神宮への寄進地系荘園であったとみることでできよう。その豪族を特定することはできないが、それ以前に他の荘園化への経過をみることでできないので、それだけでも地豪族の独立した強さがあったとすることができる。

ここに見る第4—3図田中沖遺跡の資料群は、そうした御厨支配下の集落遺跡であることは間違いないところである。小範囲に密集している常民の集落である。

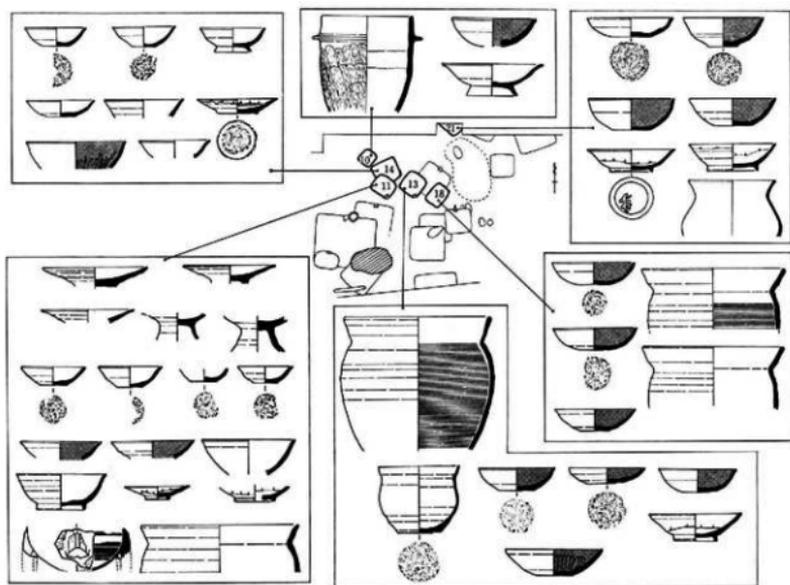
第14号住居を除いて、その主軸方向はおおむね共通していることは注意できる。そうした点を配慮して、Ⅰ(第13、18、21号住居址)、Ⅱ(第10号住居址)、Ⅲ(第14号住居址)、Ⅳ(第11号住居址)に細分することができるように思われる。しかし、それは12世紀内という限定された時間内で考えなくてはいけないように思うのである。須恵器の影響を残した土師器の内黒処理の坏群(第13・18・21号住居址)それに、灰軸陶器の影響を残した土師器の高台付の坏群(第10・11・14号住居址)、そして終末の様相として、木器の影響とみられる土師器の足高台の坏群(第11号住居址)など、その展開の中に現象している。またその中には、土師器の坏群の小形化が内在していて、第14号住居址や第11号住居址など、中世のかわらけに近いほど小形へと減少化するものこの資料群の中に読みとることができる。

またこの期には、まったく須恵器は伴出せず、東濃系の灰軸陶器が多出している。

なお、第11号住居址からは、獸脚付のおそらく、鼎形の土製羽釜と認められる土器片が検出されていることは注意される。

第4節 獸脚付鼎形土製羽釜をめぐる問題

獸脚付鼎形土製羽釜は、大室村北遺跡でまず注意された。この土器は大室村北遺跡では、内面は黒色処理されたものであったので、いわゆる、御釜形を呈してはいるが煮沸形態の土器ではないものと考えておいた。同時に採集されたといわれる資料群は、足高台の坏形土器を含



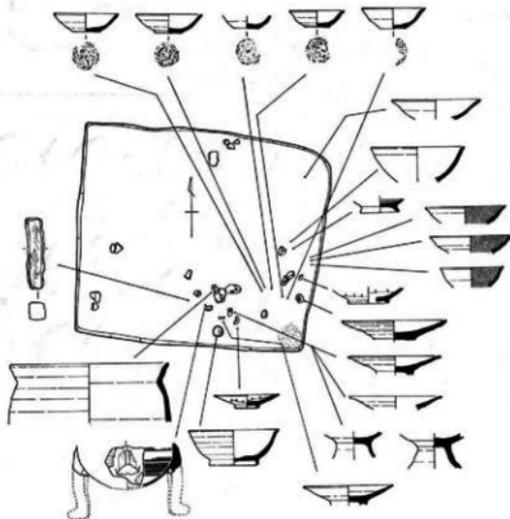
第4-3図 平安時代後半の住居址に伴う遺物群

むものであって、他に須恵質の風字硯や、洲珠焼の鉢を伴ったように見られたのである。こうしたことから、一応この時間的位置を、第五様式の終末期あるいは、中世初頭ではないかと考えたのである。

第11号住居址においては、第4—4図にみるような出土状況を示した。ほぼ方形プランの住居址南東隅には、焼土がありカマドの存在を確認できたが、その周辺には、そのカマドに用いられていたと思われる確が散乱し、その周辺にはほとんどの資料が検出されたのである。小形土器群、内黒坏群、足高高台坏群など、それぞれがブロックになって検出されていることに注意しておきたい。その出土状況からして、その住居址廃絶の際の何等かの性格を理解できる日がくるかもしれないように思うのである。獣脚付羽釜片はそれらに混在して検出されたものである。

こうして、ほぼ大室村北遺跡での『更級・埴科地方誌』古代編中の考察は、ほぼ田中沖遺跡第11号住居址の調査において追認できたと見ることができる。

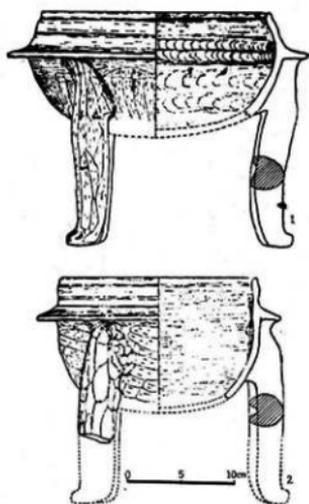
土師器のコピー的性格については、すでにふれたところであるが、とりわけ、坏形土器にその性格はいちじるしい。しかし、この獣脚付羽釜も、おそらくは須恵質土器あるいは鉄製類似品のコピーであることが判明するのではないだろうかと考えていたが、まったく同種の鉄製の獣脚付鼎形羽釜の存在することを窪田藏郎氏より教示を受けた。したがって、やはりこの



第4—4図 第11号住居址遺物出土状況

土製羽釜はコピーであったのである。その用途は煮沸形態でないとなれば火舎か、あるいは特殊な香炉であろうか。いずれにせよ、かりにこれを特殊遺物とすれば、常民の住居址に存在するということが判然としないところである。もう一つ今後に残されたと言えるであろう今後の課題である。

田中沖遺跡の調査によって、川中島扇状地の古代の姿が明らかとなりつつあると見られるのである。しかしそれは極めて限定された垣間見たにすぎない。川中島扇状地を構成する岸川の堆積態力の大きさのため、多くはまだ埋蔵されたままの状況である。



第4-5 図大室村北遺跡出土の椀脚付鼎形羽釜

出土遺物一覧表

第1号住居址(第18図)

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出土状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
1	瓶	9.9	13.4	4.8	楕形・1孔・口縁わずかに外反	外面ヘラナデ・内面ヘラナデ・ナデ	小砂	軟・不良	黄褐色	黄褐色	床面
2	甕		18.9		口縁くの字形に外反	ヨコナデ	*	良好	赤褐色	*	覆土
3	壺(?)		7.4		口縁たち上がり内寄	ロクロナデ	*	*	青灰色	青灰色	*
4	*		8.2		*	*	*	*	*	*	*

第2号住居址(第18図)

5	高坏				脚部円筒形	タテヘラミガキ	小砂	良好	赤褐色	赤褐色	覆土
6	坏	4.7	10.4		楕形・丸底・口縁内弯気味	ヘラミガキ・外面底部ヘラケズリ	*	*	*	*	*
7	甕(?)		径9.5		体部円筒形	輪横・外面ナデ・内面指圧痕	*	*	黄褐色	黄褐色	*
8	*		*8.1		*	* * * * *	*	*	*	*	*

第3号住居址(第18・27図)

9	高坏				脚部円筒形	タテヘラミガキ	小砂	良好	赤褐色	赤褐色	覆土
10	坏		12.2		楕形・口縁わずかに外反	ヘラナデ・ヨコナデ	*	*	黒褐色	黒色	*
11	*	(4.6)	12.0		楕形・平底	ヘラミガキ・底部ヘラナデ	*	*	赤褐色	*	*
11	瓶			12.5	多孔(径0.6)	ヘラナデ・内から外へ穿孔	*	軟・不良	黄褐色	黄褐色	*
4	紡錘車(?)	5.1	9.8		断面長方形・扁平						*

第6号住居址(第18・19・27図)

13	坏	(4.2)	12.3		球形・丸底	ヘラナデ・ヘラケズリ	小砂	良好	赤褐色	赤褐色	覆土
14	*			7.5	丸底気味	ナデ	*	*	茶褐色	黒色	*
15	甕			6.7	底部中央凹む	輪横成形痕・ナデ	*	*	*	*	*

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器 高	口 径	底 径					外 面	内 面	
16	甕		14.6		肩に段・口縁ゆるく外反・最大径体部	ヨコナデ・外面タテヘラケズリ	小石砂	良好	茶褐色	茶褐色	床
17	+	19.3	14.9	6.0	口縁ゆるく外反し最大径・長胴	* * * ・輪轆成り痕	* * *	*	*	*	*
18	瓶	11.0	23.4	6.5	ラッパ状・口縁外開・1孔	*	小 砂	軟・不良	黄褐色	黄褐色	*
19	甕			6.8	平底	* ・外面にカキ目	小石砂	良好	*	*	覆
20	手捏			4.3		外面指頭痕	小 石	*	*	*	*
1	増	13.7	18.1	8.3	口縁短かく外反・体部丸味・平底	ヨコナデ・ヘラミガキ	小 砂	*	茶褐色	黒 色	*
2	甕			18.5	口縁ゆるく外開し最大径	ヨコナデ・ヘラナデ	*	*	*	黄褐色	*
3	+			14.0	口縁外反・長胴形	* * *	*	*	赤褐色	*	*
5	紡錘車	4.1	5.5	8.0	断面台形1孔(径1.3)						

第7号住居址(第19図)

4	甕(?)	42.6	9.5	8.1	円筒形・口縁直立・平底で中央凹む	ヨコナデ・内面輪轆痕・指頭圧痕	小 砂	良好	茶褐色	黄褐色	床
---	------	------	-----	-----	------------------	-----------------	-----	----	-----	-----	---

第8号住居址(第19図)

5	杯			12.5	皿形	ヘラナデ	小 砂	良好	茶褐色	黒 色	覆
6	+			10.1	碗形・口縁内弯気味	ヘラミガキ	*	*	黄褐色	*	*

第9号住居址(第19・28図)

7	高杯	12.4	16.5	11.6	杯部皿形・口縁直立・脚部ラッパ状	ヘラミガキ・ヨコナデ	小 砂	良好	赤褐色	黒 色	カマ
8	杯	4.8	11.7		碗形・丸底	* ・底部ヘラケズリ	*	*	*	*	床
9	+	4.8	12.2			ヘラナデ	*	軟・不良	*	黒褐色	カマ
10	+	4.2	13.5			*	*	*	*	赤褐色	覆
11	蓋			15.2	杯受けを有す	ヨコナデ	*	良好	青灰色	青灰色	*

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出状
		器高	口径	底径					外面	内面	
12	杯	9.8	14.8	8.8	楕形・口縁内傾し端部面取り	ヘラミガキ・底部ヘラケズリ	小 砂	良好	赤褐色	黒 色	床
13	甕		19.7		口縁ゆるく外反し最大径・長割	ヨコナデ・器面ある	小石砂	軟・不良	*	黄褐色	床
1	刀子										床
2	*										*

第10号住居址(第19・28図)

14	羽釜		14.4		体部上半直線的	鍋下ヘラケズリ・ナデ	小石砂	良好	黄褐色	黄褐色	覆
15	杯		13.4		楕形・口縁わずかに外反	ヘラミガキ	小 砂	*	赤褐色	黒 色	*
16	*	5.3	16.2	7.8	杯形・口縁外反・高台付	ヨコナデ	*	*	*	赤褐色	*

第11号住居址(第20・27図)

1	杯(?)	(3.1)	16.9		皿形・口縁やや内彎・台付	ヨコナデ	小 砂	良好	赤褐色	赤褐色	カ
2	*	(2.6)	15.0		* ・口縁外反 *	*	*	*	黄褐色	*	*
3	*	(2.5)	14.5		* ・ * ・ * ・ *	*	*	*	*	黄褐色	覆
4	杯		14.4		杯形 ・ *	*	*	*	*	*	*
5	*		15.0		皿形 ・ *	*	*	*	*	*	*
6	*				台部フラップ状外側	*	*	*	*	*	*
7	*				*	*	*	*	*	*	*
8	*	3.6	10.7	4.3	杯形・口縁やや外反	* ・底部未切り	*	*	*	*	カ
9	*	3.1	10.4	4.4	* ・ * ・ *	* ・ * ・ * ・内面スス付着	*	*	*	*	覆
10	*	3.4	10.3	4.0	* ・ * ・ *	* ・ * ・ * ・ *	*	*	*	*	*
11	*			4.1	楕形 ・ *	* ・ * ・ *	*	*	*	黒褐色	*

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	
12	杯	2.7	9.9	3.9	杯形・口縁やや外反	ヨコナデ・底部糸切り	小 砂	良好	赤褐色	赤褐色	履
13	*		10.3		楕形・*	*	*	*	黒 色		
14	*		12.1		*・*	*	*	*	*		
15	*		13.4		*	*	*	*	*		
16	*		15.1		*・*	*	*	*	黒褐色		
17	*			6.0	*・高台付	*	*	*	黒 色		
18	*	5.9	14.6	7.6	*・口縁外反・高台付	*	*	*	乳灰色	乳灰色	
19	皿	2.1	11.0	4.3	体部直線的・高台付	*	*	*	灰白色	灰白色	
20	椀			6.1	高台付	*	*	*	*		
21	蹴鞠				丸底	ナデ・内面ウキ目	*	*	黒褐色	黒 色	
22	壺		26.0		口縁外反・体部に最大径	ロクロヨコナデ・スス付着	小石砂	*	黄褐色	黄褐色	カ履
8	礎石		11.5		長方形・断面四角						履

第12号住居址(第20・21図)

23	高杯	13.8	14.8	10.2	杯部楕形・短脚でラッパ状	ヨコナデ・刷毛ナデ	小 砂	軟・不良	茶褐色	茶褐色	履
24	*		13.0		* 口縁内弯・脚部筒形	ヘラミガキ	*	良好	*	黒 色	
25	杯	5.1	13.1		楕形・丸底	* 外面暗文	*	*	赤褐色	*	床
26	*	4.2	11.3		* 平底気味・口縁やや外反	*	*	*	茶褐色	茶褐色	
27	*	8.6	9.8		* 丸底・*	ヘラナデ・ヘラミガキ	*	*	赤褐色	黒 色	
28	*	2.9	11.3		*	* 底部ヘラキリ	*	*	*	赤褐色	
29	*		8.6	4.5	杯形・平底・*	*・*	*	*	*	*	履

通物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎土	焼成	色 調		注 意
		器高	口径	底径					外面	内面	
1	甕(?)	50.6	12.0	5.5	円筒形・口縁薄くわずかに外反・平底	外面刷毛ナデ・内面輪積成形・指頭痕	黄雲母 小石砂	良好	茶褐色	茶褐色	カ
2	甕		15.3		口縁わずかに外反・長胴で最大径中位	ヘラナデ	*	*	黒褐色	黄褐色	
3	*	18.7	19.3	7.0	* 球形・平底	刷毛ナデ・ヨコナデ	*	*	赤褐色	茶褐色	
4	鉢		24.9		楕形	ヘラナデ *	小 砂	*	茶褐色	*	種
5	甕		22.3		口縁くの字形外反	外面甲き目・内面青海波文	*	*	青灰色	青灰色	

第13号住居址(第21・22・27・28図)

6	杯	3.9	11.8	6.0	楕形・口縁やや外反	ヨコナデ・ヘラミガキ・糸切り	小 砂	良好	赤褐色	黒 色	種
7	*	3.7	12.1	5.8	* * *	* * * * *	*	*	*	*	
8	*	2.5	12.2	5.7	皿形・*	* * * * *	*	*	*	*	
9	*	3.8	12.5	4.9	楕形・*	* * * * *	*	*	*	*	
10	*	3.9	13.3	5.6	* * *	* * * * *	*	*	*	*	
11	*	4.2	15.6	5.8	* * *	* * * * *放射状暗文	*	*	黄褐色	*	
12	*	4.4	14.9	6.7	杯形・* 高台付	*	*	*	灰白色	灰白色	
1	甕		23.0		口縁ゆるく外反・端部内弯・最大形体部上半	口クロ整形	小石砂	*	黄褐色	黄褐色	カ
2	*		21.9		* * *	*	***	*	*	*	
3	*		24.9		* * * * *	*	***	*	暗褐色	*	
4	*		24.4		* * *	* 内面カキ目 *	***	*	赤褐色	赤褐色	
5	*		23.3		* * * * *	* * *	***	*	*	*	
6	*	10.9	12.9	7.0	* * * * * 平底	* 底部糸切り・X印	小 砂	*	*	茶褐色	種
2	羽口		径 5.5		円筒形 1孔(径1.9)		小石砂	*	黄褐色		

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	
3	羽口				円筒形・1孔		小石砂	良好	黄褐色		覆
3	刀子										*

第14号住居址(第22図)

7	杯		9.9	4.3	杯形・口縁やや外反・上げ底	ヨコナデ・底部未切り	小 砂	良好	赤褐色	暗褐色	覆
8	*		10.1	3.7	* * * *	* * *	*	軟・不良	黄褐色	黄褐色	*
9	*		10.4	4.1	* * * *	* * *	*	*	*	暗褐色	*
10	*		10.5	5.9	碗形・ * ・高台付	*	*	良好	赤褐色	*	*
11	*		10.9	4.6	皿形・ * ・上げ底	* * *	*	*	黄褐色	黄褐色	*
12	*		12.6		杯形・ *	*	*	*	赤褐色	赤褐色	*
13	段皿		13.0	6.4	皿形・ * ・つくり出し高台	* * *	*	*	灰白色	灰白色	*
14	*			5.7	碗形・ 上げ底	* * *	*	*	灰褐色	赤褐色	*
15	*		16.0		* * * ・放射状暗文	*	*	*	黄褐色	黄褐色	*
16	*		11.5		*	*	*	*	*	*	*

第16号住居址(第23・28図)

1	高杯	14.5	16.1	11.0	口縁外反・脚部円筒で裾外開	ヘラミガキ・ヨコナデ	小 砂	良好	赤褐色	黒 色	覆
2	杯	5.3	10.5		碗形・丸底	ヘラナデ	*	*	*	赤褐色	*
3	*		9.0		* ・口縁内弯気味	* ・内蓋キ目	*	*	暗褐色	暗褐色	*
4	刀子										*
5	*										*
6	蹄跗(?)				くの字状に折れ、片刀						*

第17号住居址(第23図)

遺物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外 面	内 面	
4	甕	33.9	16.7	6.5	口縁わずかに外反・長胴で中位に最大径	ヘラナデ・ヨコナデ・輪積痕	小石砂	良好	赤褐色	赤褐色	カ

第18号住居址(第23図)

5	杯	3.6	13.4	5.0	皿形・上げ底	ヨコナデ・底部糸切り	小 砂	軟・不良	赤褐色	黒 色	覆
6	*	3.5	13.4	5.3	* * *	* * *	*	良好	*	*	カ
7	*	4.4	13.0	4.5	* * * ・口縁やや外反	* * *	*	軟・不良	*	*	カ
8	甕		22.7		口縁ゆるく外反し端部内寄	* ・ 内面カキ目	小石砂	良好	黄褐色	*	カ
9	*		22.6		*	* -	***	*	*	*	カ

第20号住居址(第23図)

10	杯	5.5	16.9		杯形・丸底	ヨコナデ	小 砂	良好	赤褐色	赤褐色	覆
----	---	-----	------	--	-------	------	-----	----	-----	-----	---

第21号住居址(第24図)

1	杯	3.2	13.8	6.2	皿形・口縁やや外反・上げ底	ヨコナデ・ヘラミガキ・底部糸切り	小 砂	良好	赤褐色	黒 色	覆
2	*	4.9	12.9	4.5	碗形・ * * *	* * * * *	*	*	*	*	カ
3	*	4.0	13.3	5.7	* ・ 口縁直立・ *	* * * * *	*	軟・不良	*	*	カ
4	*	2.7	11.4	6.4	皿形・口縁やや外反・ *	* * * * *	*	良好	*	*	カ
5	*	5.2	13.9	6.0	碗形・ * * * *	* * * * *	*	*	暗褐色	*	カ
6	*	4.5	13.8	5.7	* * * * *	* * * * *	*	*	赤褐色	*	カ
7	*		13.5		* * *	* * * * *	*	軟・不良	黄褐色	*	カ
8	甕			5.5	上げ底	* ・ 底部糸切り	*	良好	暗褐色	暗褐色	カ
9	杯	3.7	14.1	6.6	杯形・口縁外反・高台付	* ・ 台付・黒書	*	*	灰白色	灰白色	カ

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	
10	杯		13.9	8.0	楕形・口縁やや外反・高台付	ヨコナデ	小 砂	良好	灰白色	灰白色	覆
11	壺			9.8	底部糸切り	ロクロ製形	小石砂	*	赤褐色	赤褐色	覆
12	*		14.0		口縁ゆるく外反・底部球形	ヨコナデ	***	軟・不貞	*	*	覆

第23号住居址(第24・25図)

13	把手付壺	27.4	22.8	10.3	口縁ゆるく外反・球形胴・平底	ヨコナデ・ヘラナデ	小石砂	良好	赤褐色	暗褐色	床
1	杯			4.4	楕形・平底気味	* ・ヘラケズリ	小 砂	軟・不良	黒褐色	*	覆
2	皿	3.4	19.6	16.8	口縁内寄しながら立ち上る・平底気味	* ・ *	*	*	*	赤褐色	床
3	高杯			8.6	脚部筒形・裾部外開	ヘラミガキ	*	良好	赤褐色	*	床
4	*				*	*	*	*	*	*	床

第26号住居址(第24図)

14	高杯			11.1	脚部ラッパ状に外開	ヘラミガキ・ヨコナデ	小 砂	良好	暗褐色	赤褐色	覆
15	*			10.0	*	* ・ヘラナデ	*	*	赤褐色	*	覆
16	杯	4.1	10.5		楕形・口縁内寄・丸底	ヘラケズリ・ヘラナデ	*	*	*	*	覆
17	壺			4.2	小形長胴・底部中央凹む	ヨコナデ・ヘラナデ	*	*	茶褐色	*	覆
18	瓶			7.0	平底1孔	* ・ヘラケズリ	*	*	赤褐色	暗褐色	覆
19	碗(?)		14.7		口縁やや外反	ヘラナデ・ヨコナデ	*	*	茶褐色	茶褐色	覆

第28号住居址(第25図)

5	壺		18.6		口縁ゆるく外反	ヘラケズリ・ヨコナデ	小石砂	良好	赤褐色	赤褐色	覆
6	*		23.4		* 最大径	* ・ * ・刷毛ナデ	***	*	*	黒褐色	覆
7	*		21.8		口縁内寄・面取り	ヨコナデ	***	*	*	茶褐色	覆

通物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	
8	杯		11.2		楕形・丸底気味	ヨコナデ・ヘラナズリ・ヘラミガキ	小 砂	軟・不良	茶褐色	黒 色	覆
9	*	4.4	15.0	4.8	環形・上げ底	ヨコナデ・底部未切り・*	*	良好	赤褐色	*	*

第29号住居址(第25図)

10	壺			5.6	底上げ底気味	ヨコナデ・底部本葉痕	小 砂	良好	暗褐色	黄褐色	覆
11	杯		14.4		楕形・口縁やや外反	ヘラナデ・ヘラミガキ	*	*	茶褐色	黒 色	*

第30号住居址(第26・27図)

12	壺		13.0		口縁短かく外反	ヨコナデ・ヘラミガキ	小 砂	良好	暗褐色	赤褐色	覆
13	杯		12.8		楕形・口縁やや外反	ヘラミガキ	*	*	赤褐色	黒 色	*
14	壺		15.0		口縁くの字形に外反	刷毛ナデ・ヘラナデ・ナデ	小石砂	*	*	赤褐色	床
15	*		15.4		口縁ゆるく外反・肩に段・長胴・丸底気味	*・*・*・ヨコナデ	***	*	暗褐色	*	*
16	*		22.4		口縁くの字形に外反・厚い	ヘラナズリ・ヨコナデ	***	*	黄褐色	茶褐色	*
17	*		26.6		口縁ゆるく外反・肩に段	*・ヘラナデ・ヨコナデ	***	*	暗褐色	赤褐色	覆
18	*			7.0	平底	ヘラナデ	***	*	*	暗褐色	*
19	横板		10.1		口縁強く外反	ヨコナデ・タタキ目	小 砂	*	青灰色	青灰色	*
7	勾玉	3.7	1.1								

土 壇 4 (第26図)

1	壺		21.6		口縁くの字状で壇部折り反し口縁	刷毛ナデ・ヘラナデ・ヨコナデ	小石砂	軟・不良	黄褐色	灰褐色	覆
2	*			5.5	球形胴・上げ底気味	ヘラナデ	***	*	茶褐色	*	*

土 壇 5 (第26図)

3	高杯		13.4		環形・口縁やや外反	ヘラミガキ	小 砂	良好	赤褐色	赤褐色	床
4	増	11.1	10.5	3.5	口縁外反・球形胴・上げ底	ヘラナズリ・ヘラナデ・ヨコナデ	*	*	*	暗褐色	壺

遺物番号	器種	法 量(CM)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 土 状 態
		器高	口径	底径					外 面	内 面	
5	埴	12.2	10.1	2.5	口縁直線的・扁平球形胴・上げ底中央凹む	刷毛ナデ・ヘラナデ・ヨコナデ	小石砂	軟・不良	黄褐色	黄褐色	床
6	甕			4.2	平 底・球形胴・ *	ヘラケズリ・ *	***	良好	黒褐色	*	*
7	*	23.4	19.4	5.3	口縁外反・* * * スス付着	刷毛ナデ・ヘラナデ・ヨコナデ	***	*	暗褐色	暗褐色	*

柱 穴 群(第26図)

8	埴	9.8	7.1		口縁直立・肩に浅線・丸底	ヨコナデ	小 砂	良好	青灰色	青灰色	覆 土
---	---	-----	-----	--	--------------	------	-----	----	-----	-----	-----

その他出土遺物(第26・27図)

9	高坏				胴部円筒形	ヘラミガキ・ヘラナデ	小 砂	良好	黄褐色	黄褐色	包含物
10	*				*	* * *	*	*	赤褐色	黒 色	*
11	*				*	* * *	*	*	*	*	*
12	*				*	ヘラナデ	*	*	*	*	*
13	坏	4.9	12.2	5.4	胴形・口縁部外反・上げ底	ヘラミガキ・ヨコナデ・暗文・糸切り	*	*	*	*	*
14	*	4.0	14.6		皿形・底部丸味	* * ヘラケズリ	*	*	*	*	*
15	内耳 網					ヨコナデ	砂 質	*	黄褐色	黄褐色	*
16	*	5.9	30.0	27.3		*	*	*	*	*	*
1	*	5.6	31.0	29.5	耳付部成り上り・胴縁で補修	*	*	*	暗褐色	暗褐色	*
6	紡錘 車	2.3	2.9	4.6	断面台形・1孔(径)						*
8	砥石				不整形						*
9	*				断面長方形						*
10	円板	0.6	2.2		レンズ状						*
7.8	釘(?)	6.7			断面丸に近い角						*



第11回 調査地周辺の環境

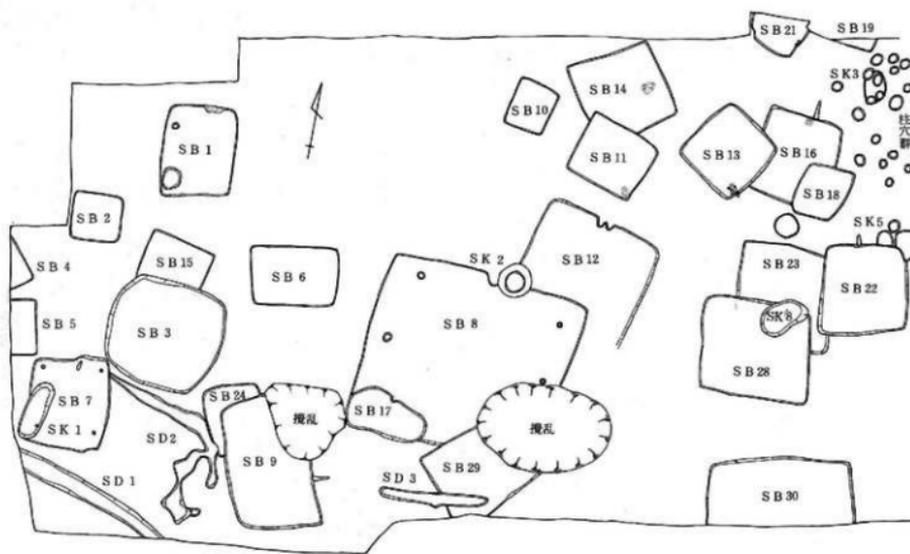
1. 田中沖遺跡(調査地)
2. 境内古墳
3. 花立遺跡
4. 牧島遺跡
5. 松原遺跡
6. 初代城跡北遺跡
7. 四ノ宮遺跡
8. 岩野遺跡
9. 横田遺跡群
10. 磯ノ舟遺跡群
11. 横村新方原川墳
12. 林正寺遺跡群
13. 石坂古墳群
14. 柳沢古墳群
15. 大正古墳群(赤山支部)
16. 舞鶴山1・2号墳
17. 栗川川原古墳群
18. 六風古墳群
19. 倉科寺平塚
20. 赤山古墳群
21. 矢ノ口・杉山古墳群
22. 土口町軍塚
23. 土口古墳群
24. 土口北山遺跡
25. 生沢古墳群
26. 扇代遺跡群
- 27-29. 赤松十光命神社
30. 扇気神社
31. 戸部太神宮
32. 布座神社
33. 横田城址(?)
34. 清野古墳群
35. 森野軍塚
36. 有明山行軍塚



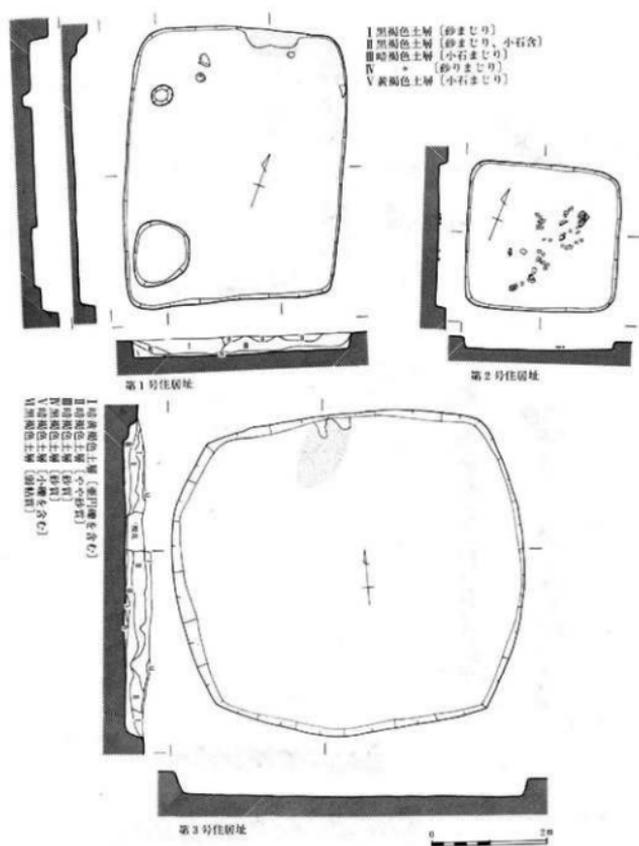
第2図 田中沖遺跡周辺図



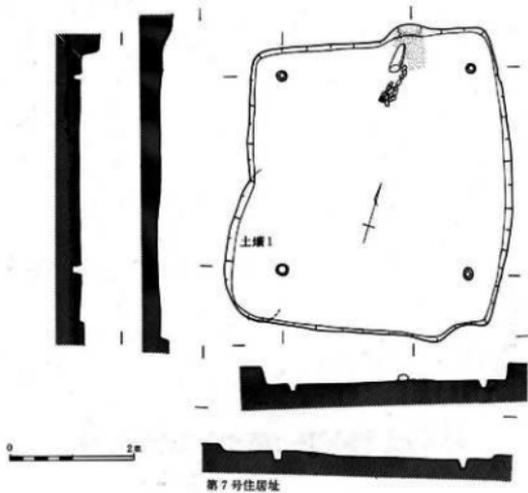
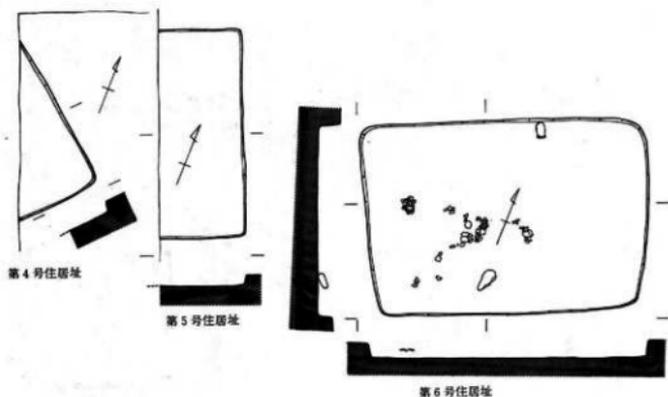
第3図 田中遺跡調査地



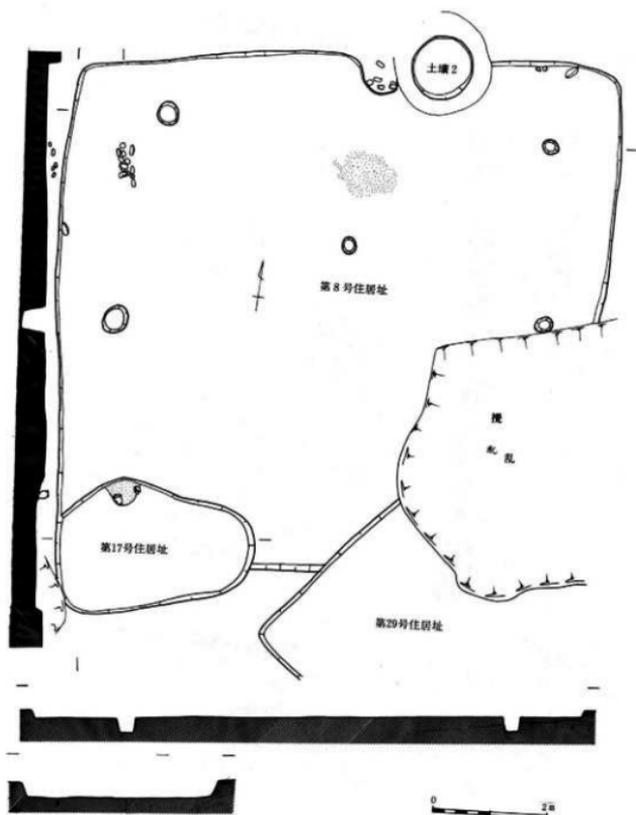
第 4 圖 田中沖遺跡遺構分布圖



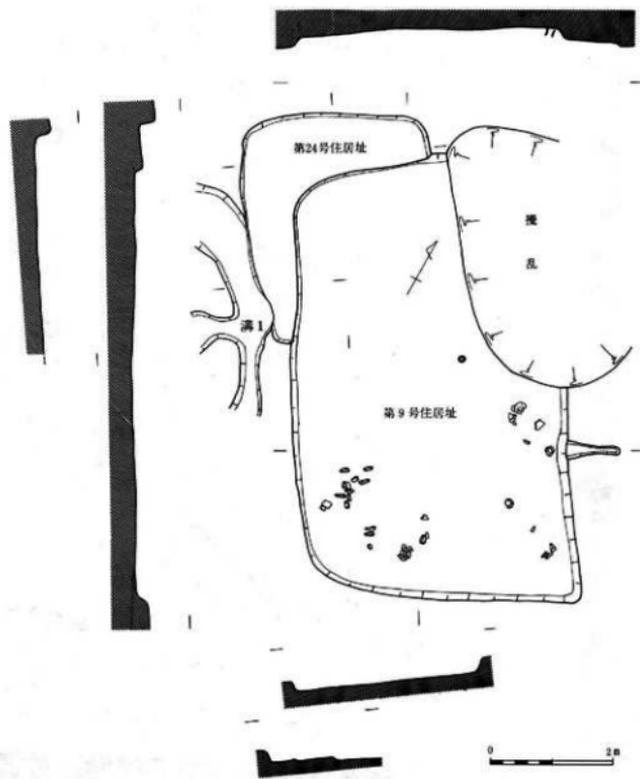
第5図 第1～3号住居址実測図



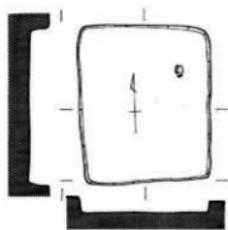
第6图 第4~7号住居址实测图



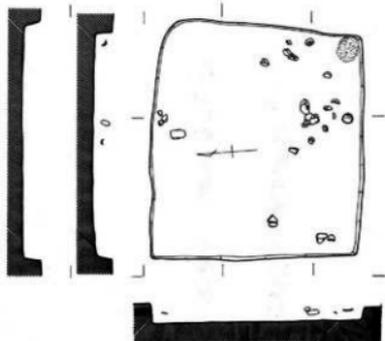
第7图 第8・17号住居址实测图



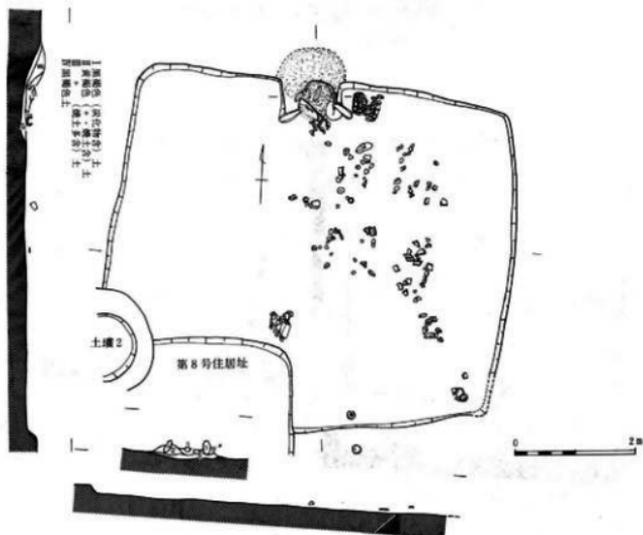
第8图 第9·24号住居址平面图



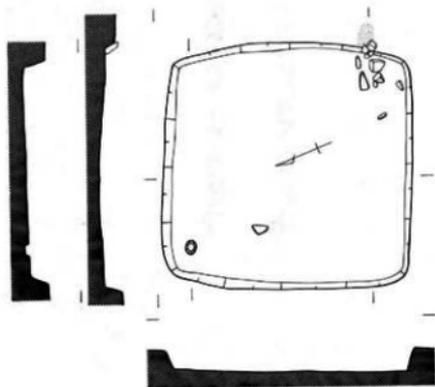
第10号住居址



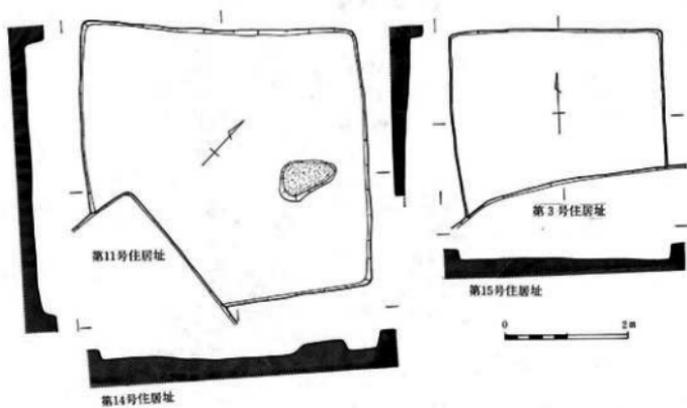
第11号住居址



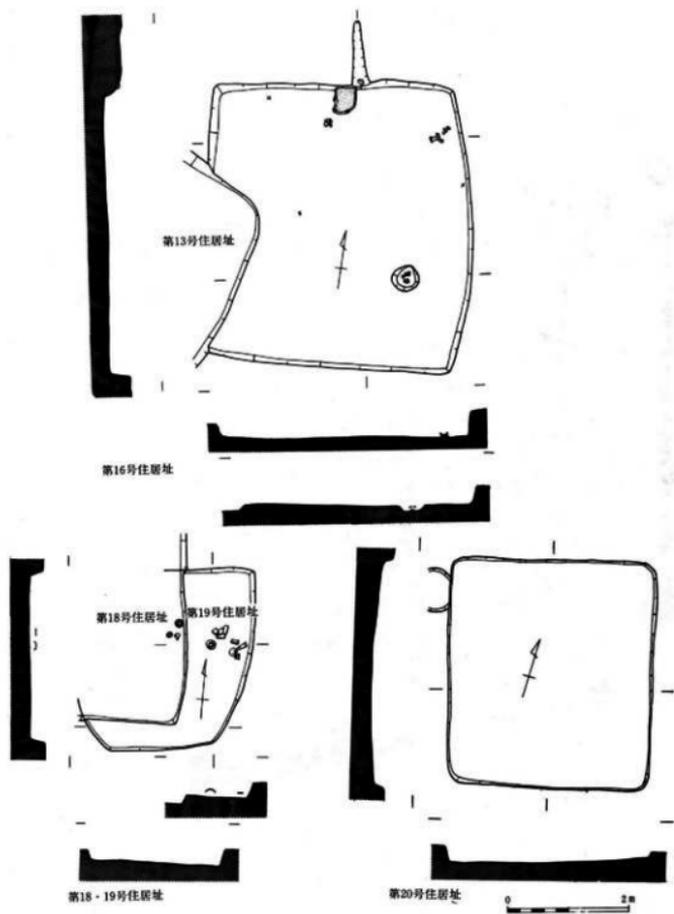
第9图 第10~12号住居址实例图



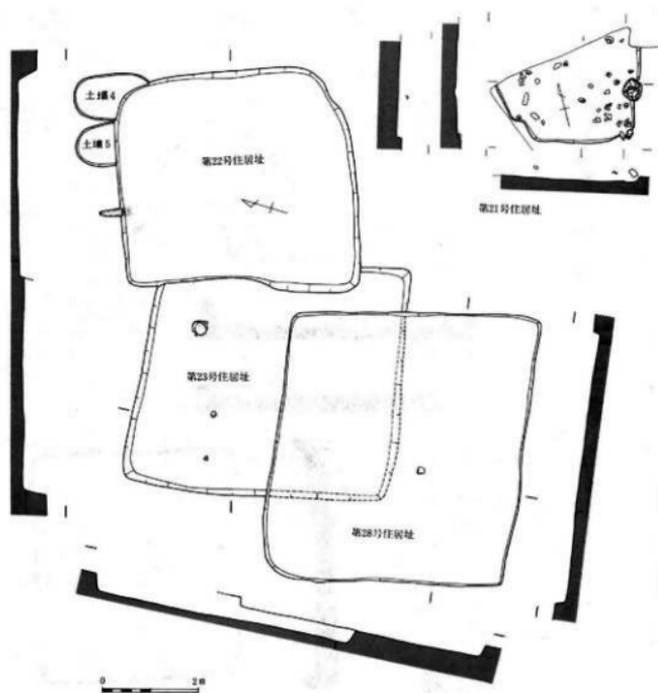
第13号住居址



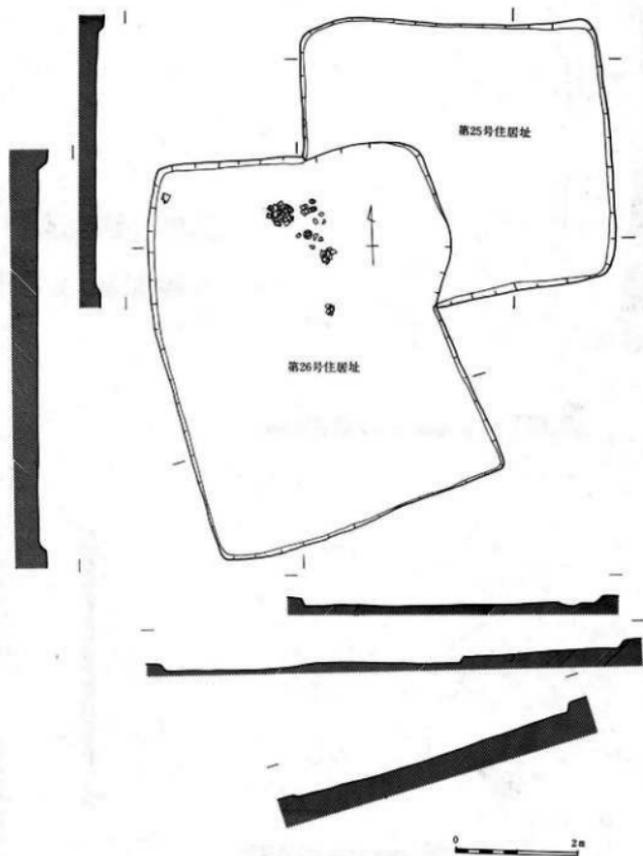
第10图 第13~15号住居址实例图



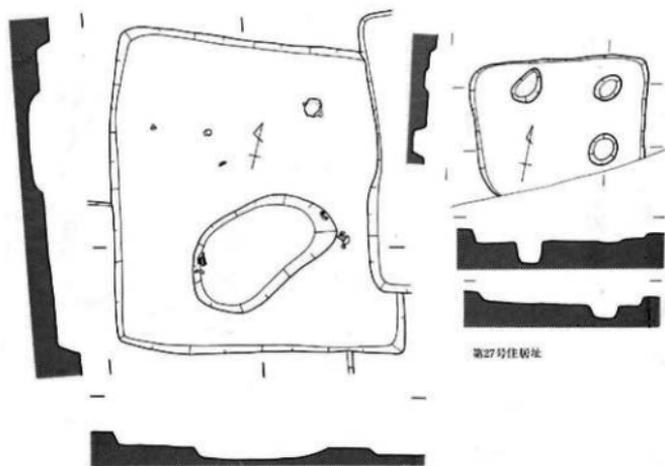
第11图 第16·18~20号住居址实测图



第12図 第21～23・28号住居址実測図

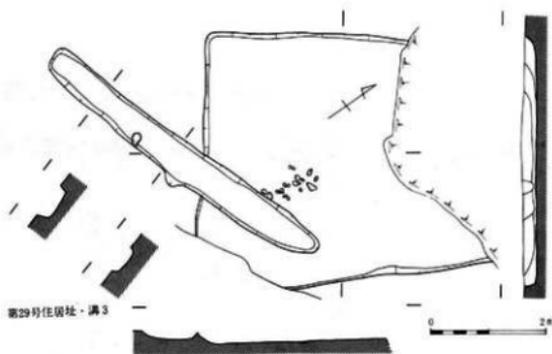


第13图 第25·26号住居址实例图



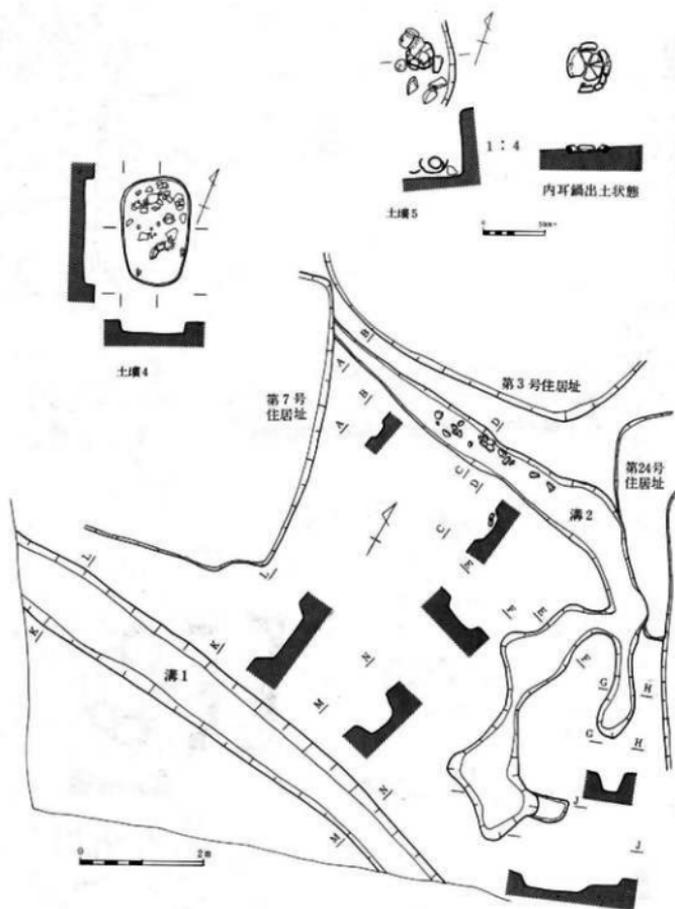
第23号住居址·土壇 8

第27号住居址

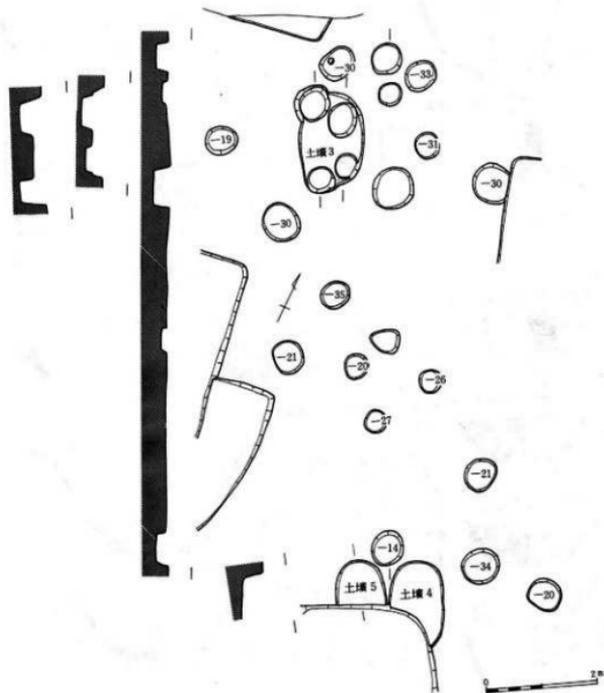


第29号住居址·溝 3

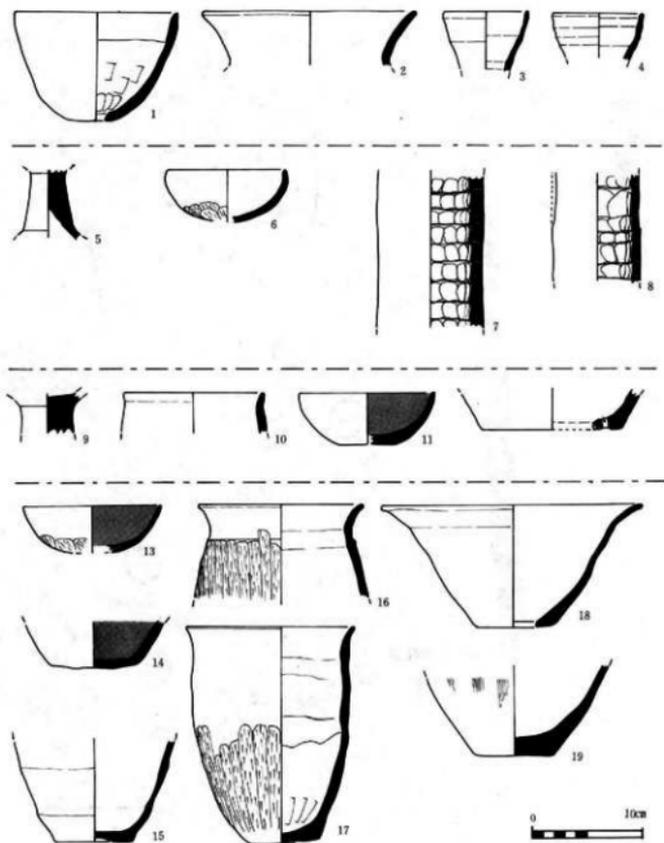
第14图 第23·27·29号住居址，土壇 8，溝 3 实测图



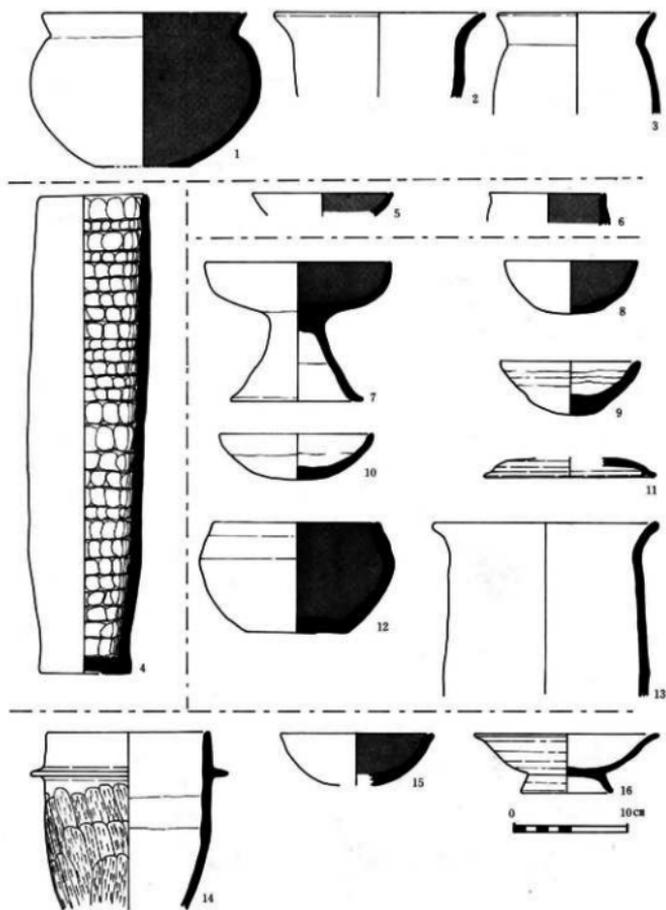
第16图 土壘4・5，内耳竹土器出土状态，溝1・2实例图



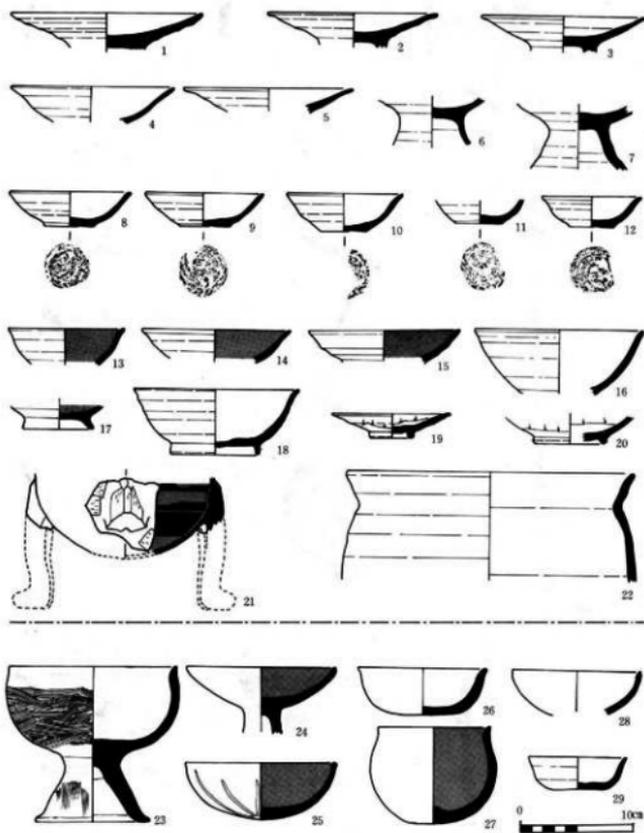
第17图 柱穴群平面图



第18图 第1~3·6号住居址出土土器

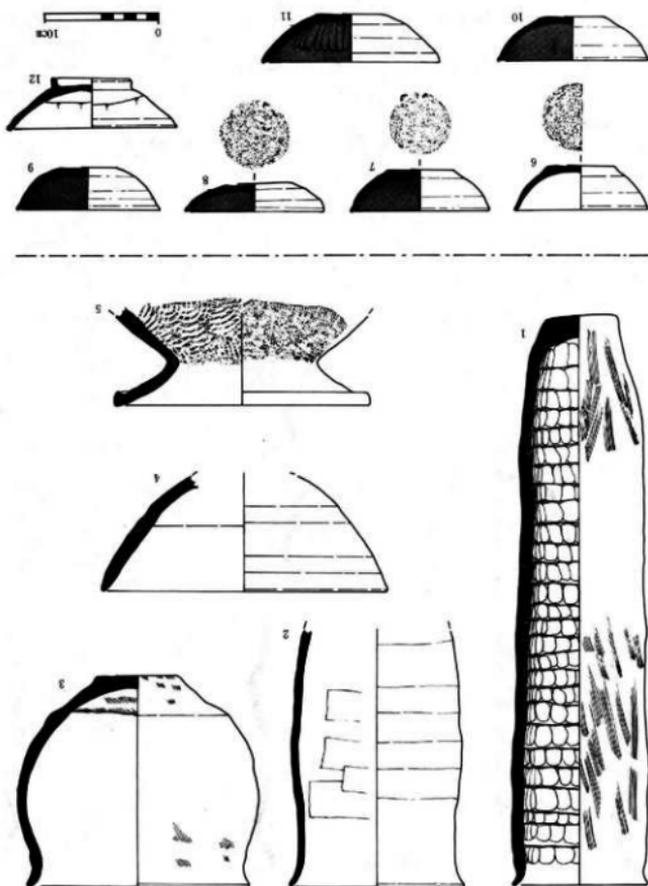


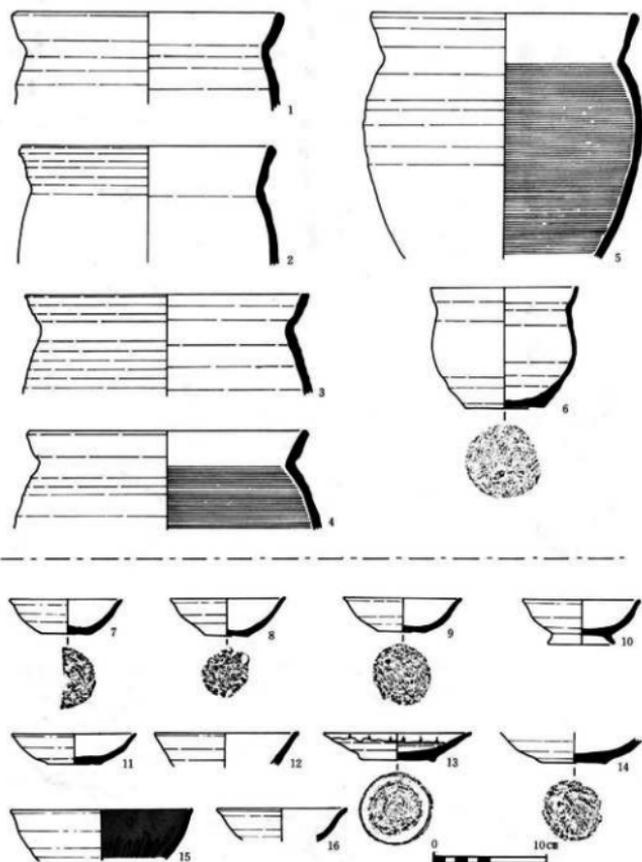
第19图 第6~10号住居址出土土器



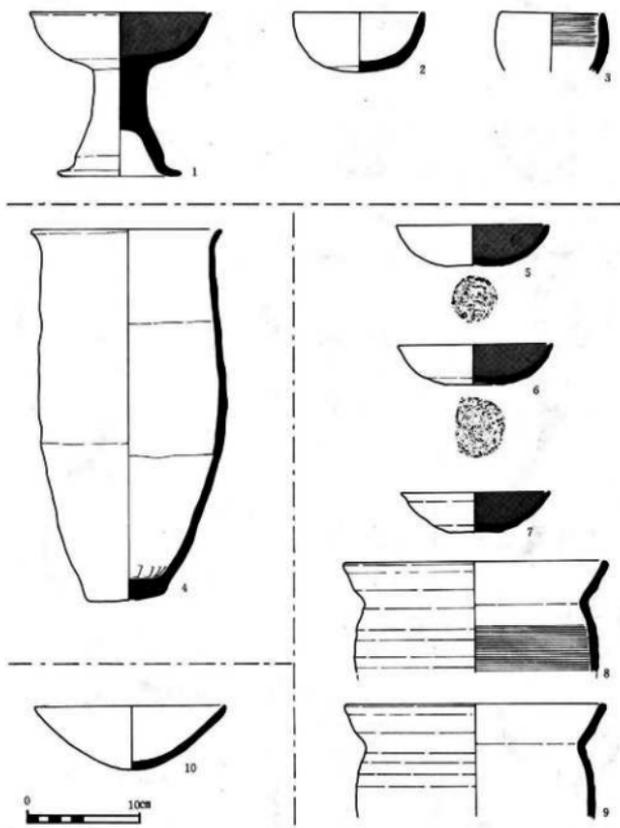
第20图 第11·12号住居址出土土器

第21圖 第12・13号住居出土土器

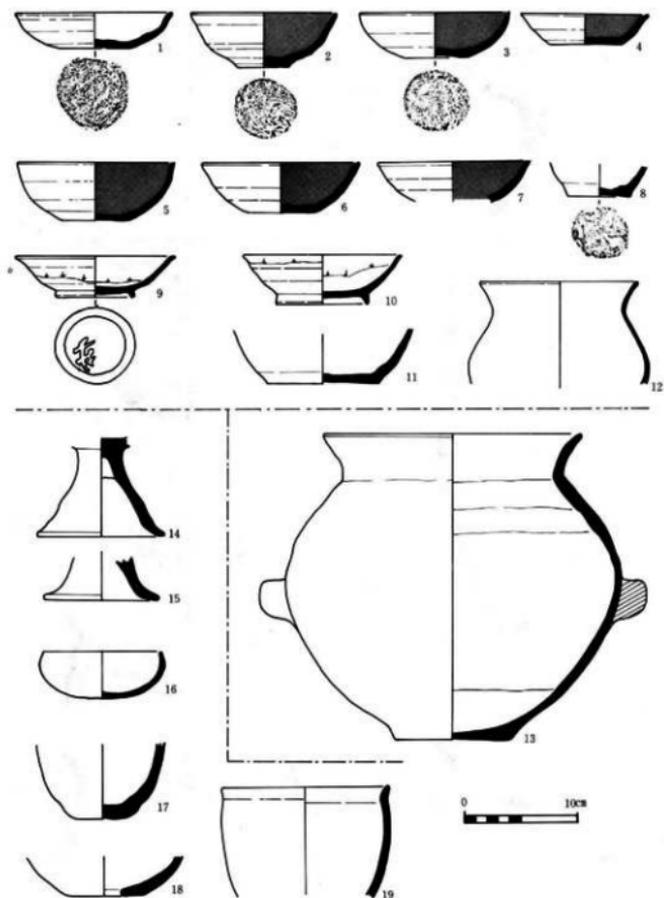




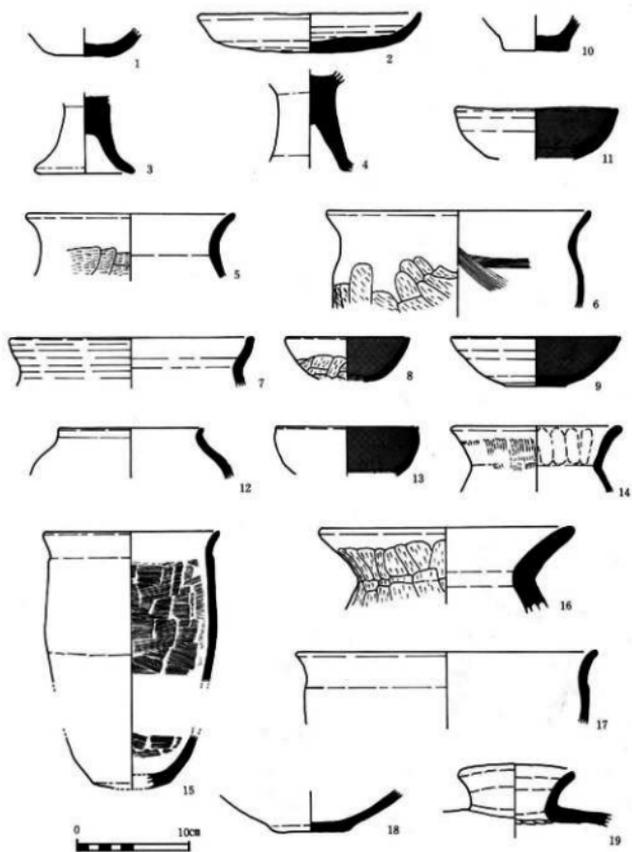
第22图 第13·14号住居址出土土器



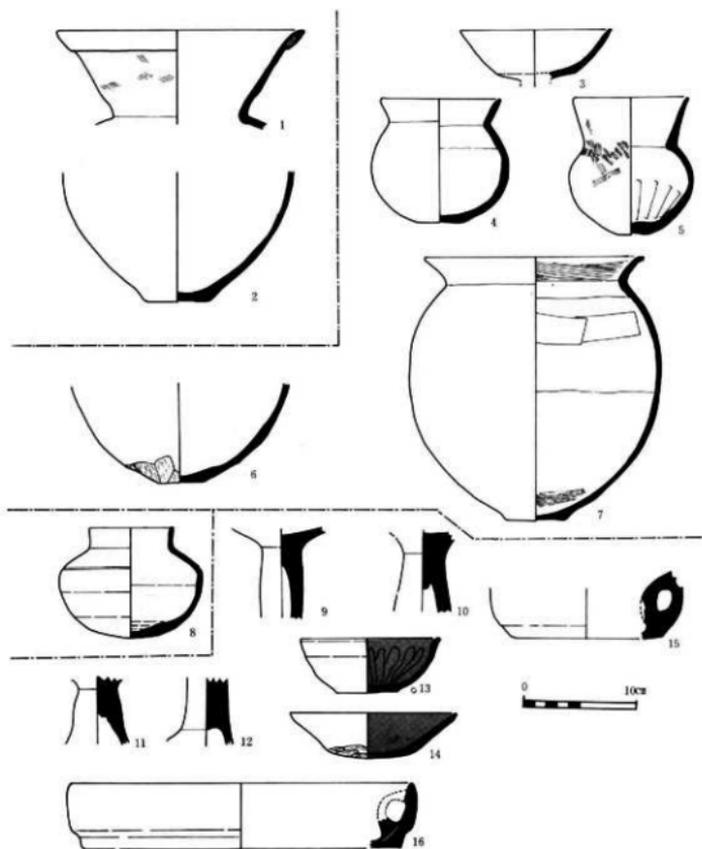
第23图 第16~18・20号住居址出土土器



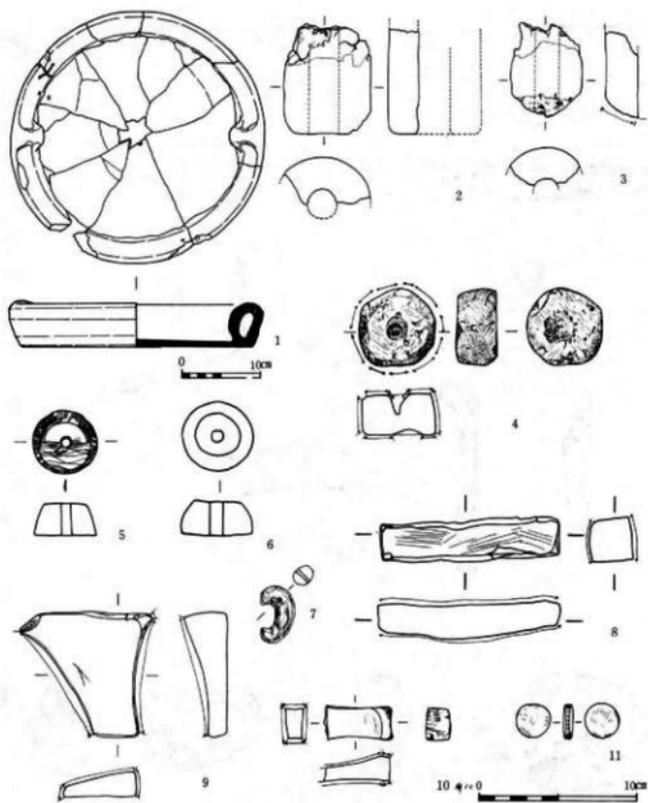
第24图 第21·23·26号住居址出土土器



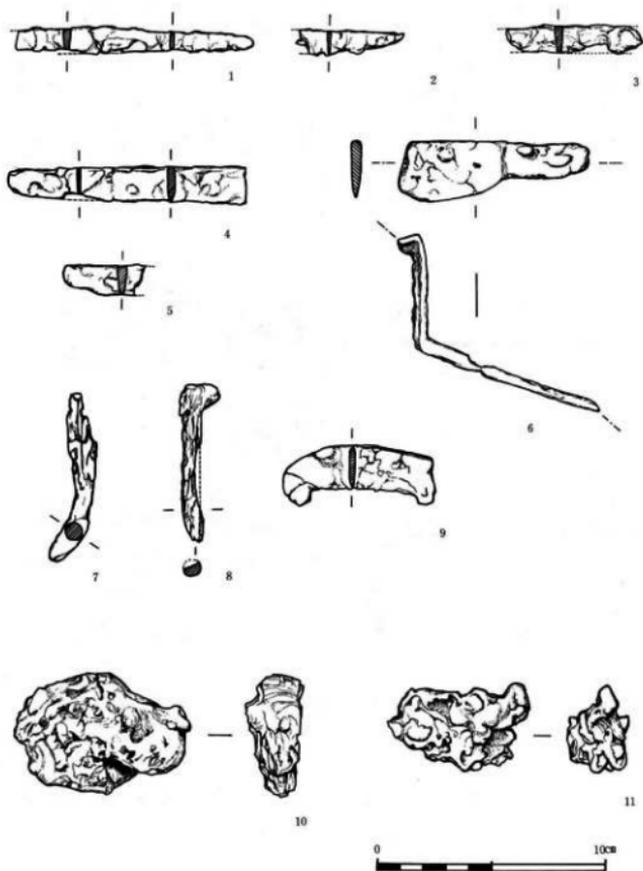
第25图 第23·28~30号住居址出土土器



第26図 土甕4・5，柱穴群，その他出土土器



第27図 第13・3・6・11・30号住居址, その他出土製品・石製品



第28図 第9・10・13・16号住居址、その他出土鉄製品



田中沖遺跡遠景 (正面調査地西より)



同 (北より)

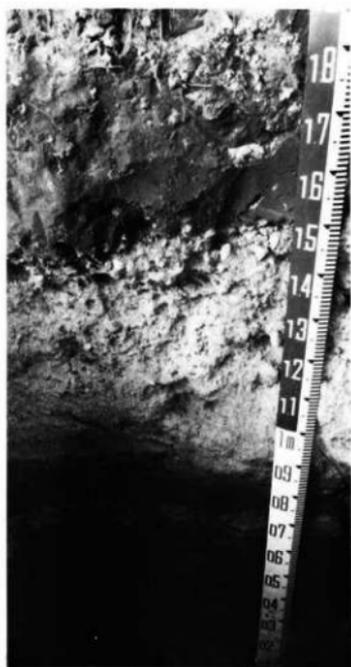
第二図版 調査地・調査地より北を臨む



調査地（東より）



調査地より北を臨む



表土

黒褐色
砂質土層

砂利混り白褐色
砂層

白褐色砂層

礫混り
白褐色砂層



第20号

第19号 第18号

第16号

第13号

第14号 第11号

第10号 第12号 第8号

第6号

第1号

第2号

地層序

第四図版
遺構分布状態(西より)



第12号
第8号 第17号
第6号、第24号、第9号

第1号 第15号 第3号

第2号

第4号 第5号



第6号 第24号、第9号
第15号、第3号 溝2

第11号

第5号



第17号 第9号

第3号 溝2

溝1

第7号 土壇1



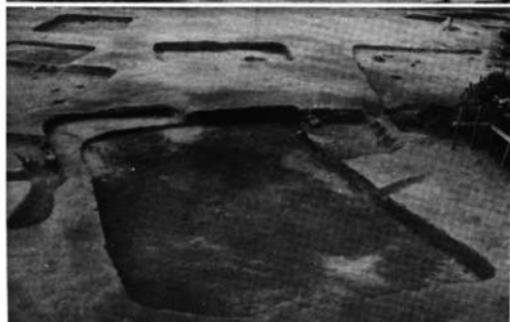
第1号
 第2号 第15号 第6号
 第4号 第3号
 第5号 第24号
 溝2
 第7号
 土壇1

溝1



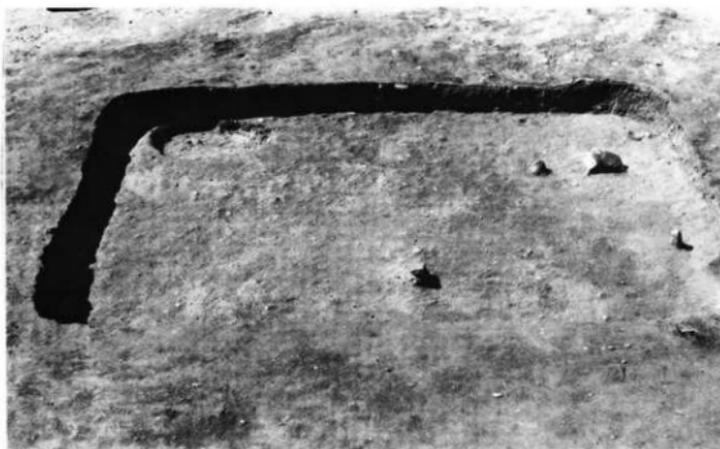
第1号
 第2号 第15号 第6号
 第3号
 第24号・第9号
 第7号 溝2

溝1



第1号 第10号・第14号
 第15号 第6号 第11号
 第3号 第12号
 第8号
 溝2・第24号
 第17号
 第9号

第五図版 遺構分布状態(南より)



第1号住居址



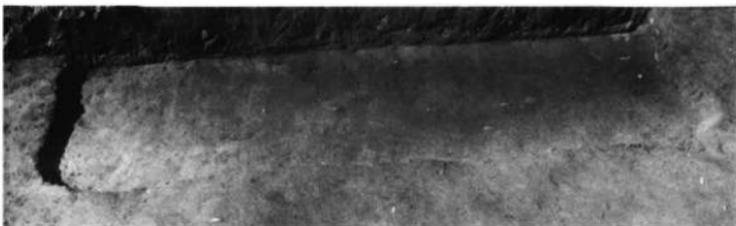
第2号住居址



第3号住居址



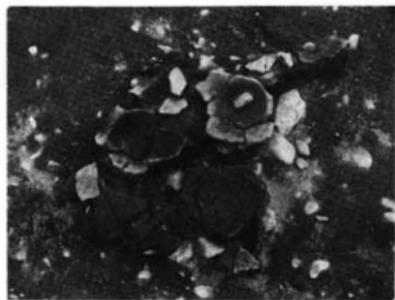
第4号住居址

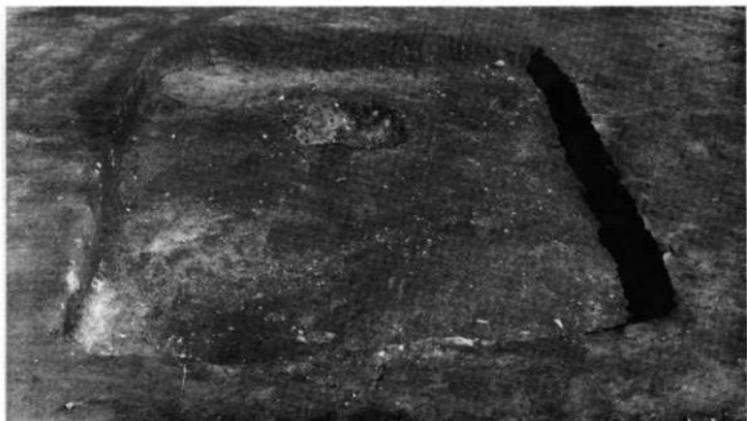


第5号住居址

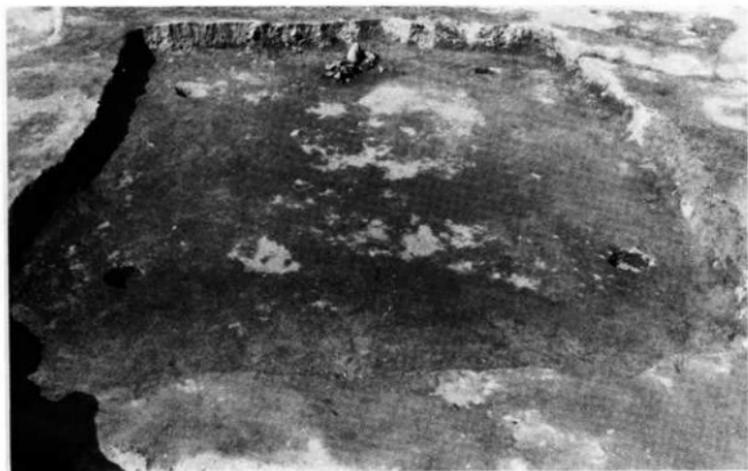


東より



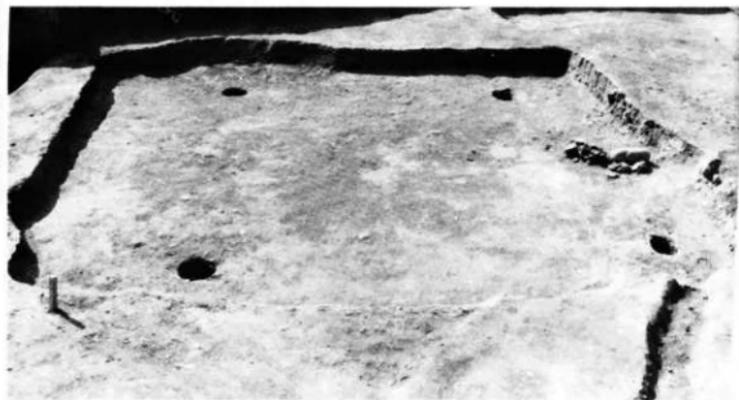


第6号住居址



第7号住居址

第一〇圖版
第七号住居址





西より



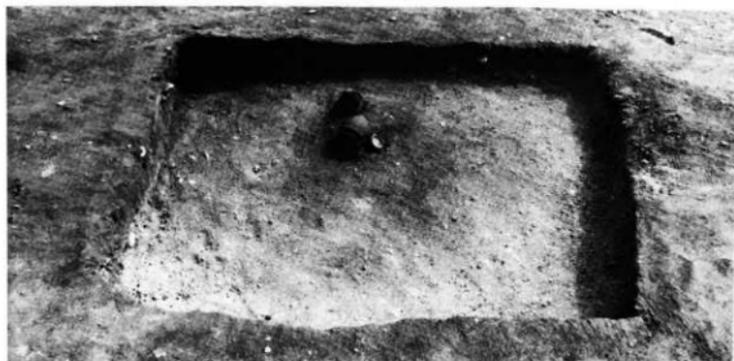
南東より



第9号住居址



第24号·9号住居址

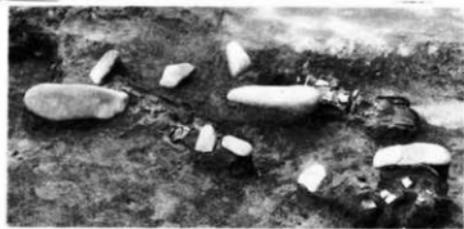


第10号住居址



第11号住居址

第一四四圖版 第二号住居址



第一五圖版 第一三號住居址





第14号住居址



第15号住居址



第16号住居址



第17号住居址



第18号住居址



第19号住居址



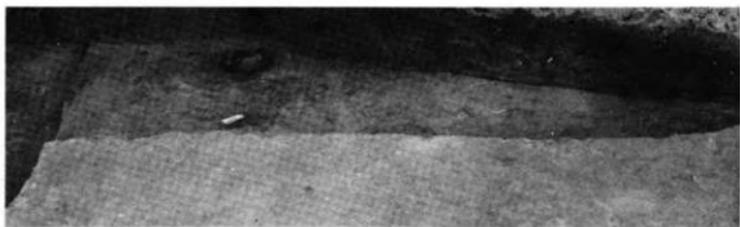
第20号住居址



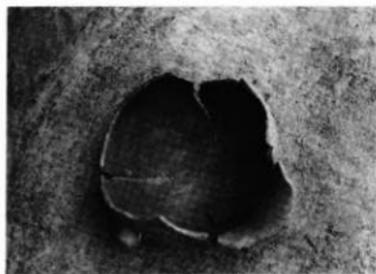
第21号住居址

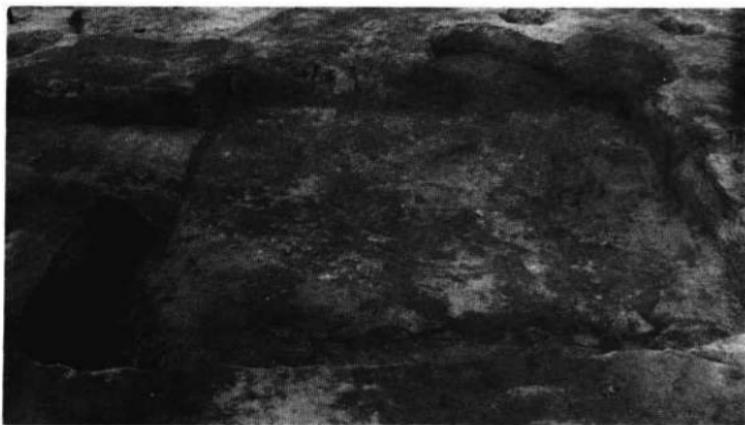


第22号住居址



第23号住居址





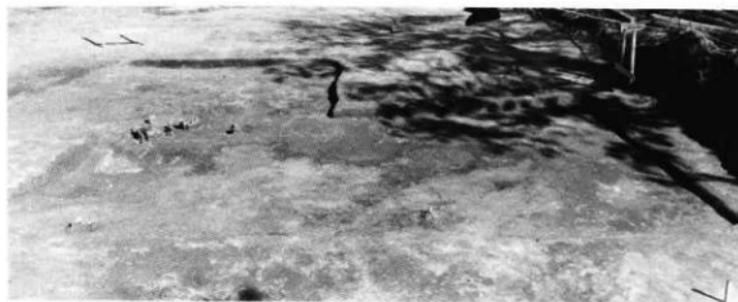
第22号住居址



第23・28号住居址・土壤8



第25号住居址



第25号住居址

第27号住居址

第26号住居址